

・・・生老病死は、他力の苦行では決して解放されることはないのだ。

常に不安と不信が同居し、疑問があっても明らかにできず、永い習慣に心まで柔軟さを失ってゆくものだ。

燃える心を静めるためには、心と行ないによる八つの正しい道を活かすことである。生活の物差しとすることである。そうして、燃えている原因を除くことが大事なのだ。

原因を除かぬかぎり、また残り火によって、燃え出すであろう。

心は常に、丸く、大きく、豊かでなければならない。

燃えれば、煙も出るだろうし、その煙は心を蔽い、神の慈悲の光をさえぎってしまうだろう。

正しい八つの道を尺度として、反省の中から、その残り火さえも根絶させなければならぬのだ。

その時に、人の心は慈悲の光に埋まり、苦しみから解脱し、光明という世界がひらけてくる。五官にとらわれた肉の身のはかなさ、無意味さ、人間のなんたるかを知り、安らぎの心を悟るのだ。

人間釈迦④ P245

法は、正しく行ずる者のなかにある。姿や形、形式のなかにあるものではない。ふだんの心の動き、そして行為が法に適っているかどうかの問題なのである。そなたらは法の実践者でなければならない。また、それを望み、求めてきた者であろう。それがいつの間にか五官に迷い、六根に翻弄されるとすれば出家の資格者とはいえない。

感覚が問題として肉体を裂いたとしても、心を正さなければなんにもならない。肉体は心の乗り舟であり、肉体そのものに六根があるのではない。肉体を縁にして、心が肉体にまつわる思いにとらわれるので六根が生まれる。つまり、六根の根は、すでに心にある。心が原因である。だから、心を正さなければ肉体にまつわる思いが再び襲ってくる。

したがって、この手がいけない、この足が悪いというものではない。そなたらの五体は両親を縁として神仏よりあたえられたものである。そしてこの五体はこの地上にふさわしい形で適応されている。つまりは調和されている。調和されているから健康で生きられる。健康でないのは心である。本来、健全なのだが、地上の生活になれてくるにしたがって、自我が芽生え、心がいびつになってくる。いびつはやがて六根となり、そなたらの想念と行為となって現われてくるわけである。

正しく見、正しく語り、正しく仕事をなし、正しく生活し、正しく道に精進し、正しく念じ、正しく定に入るの八正道の実践こそ、わたしがいう法である。

八正道の中心は、神仏の光につながっている各人の心である。その光を八正道の歩みによって現す、これが法の実践である。仏法は他人のためにあるのではない。すべては各人一人一人のためにある。そうして、その喜びを、慈悲を、他に及ぼしていくものだ。かくして、この地上に仏国土が生まれよう。

仏国土はまず各人の心の中に築かなければならない。

現在のそなたらの修行は、心に仏国土をつくる。すなわち悟りの境涯に至ることだ。彼岸に至る修行が、今そなたらの生活であり、目標だ。在家の人たちに劣るような行為があってはならないだろう。

心の指針 P094

八正道は、人間をして、中道を歩ませる規範であります。天国につながるかけ橋です。左にかたよらず、右に曲らぬ中道への道、つまり、神性、仏性への道、正覚への道なのです。すなわち、一、正しく見ること、一、正しく思うこと、一、正しく語り、正しく仕事をする事、一、正しく生活すること、一、正しく道に精進すること、一、正しく念ずること、一、正しく定に入る事、の八つです。

この八つの規範の一つが欠けても、中道の道は歩めないし、正覚を得ることも、不可能であると説いています。また、これ以上であってもいけない。たとえば、戒を守れとか、瞑想のみの生活を送れとか、苦行せよ、といったようなものです。

心の指針 P118

八正道は行ずることです。

心眼を開く P065

正法の根本は八正道です。八正道は己の心を中道という調和にひき戻す神の規範です。その規範に、無理がなく、心が自然についていける自分自身になったときに、人ははじめて、菩薩の行が整ってくるのです。八正道も知らず、心の調和もなし得ない者に、どうして菩薩行がなし得ましょう。不安と混乱を巻き起こすのみです。

心眼を開く P084

八正道は、心の安らぎを得る唯一の道であり、潜在された智慧こそ、人生の偉大なる羅針盤であることを知って欲しいと思います。

心眼を開く P098

八正道はまず反省から始まるが、反省の仕方は客観的立場から自分をながめ、相手を見ることです。そうして自分の欠点が浮き彫りされるようであれば駄目なのです。自分に愛想がつきて、そこで自分を捨てたときに、神の光が入ってきます。ところがここで、なかなか自分が捨てられません。六根から抜けられないのです。そこで私は勇気を持って努力しなさいとっているのです。

さてそこで、勇気はどうすれば出るのでしょうか。

仕事や遊びでもいい、夢中になっているときは疲れを覚えないものです。用が済んで、ヤレヤレと思ったときに疲れが押し寄せます。

よく引き合いに出る話ですが、ふだんは弱い女性が、火事で子供が家に閉じ込められたとき、その女性は我を忘れて火炎の中に飛びこみ焼死寸前の我が子を救ったといひます。夫は家の外でオロオロするばかりで肝心かなめなときに何も出来なかったというのです。

この話はいろいろな意味を含んでいますが、こうした勇気はどこから生まれたのでしょうか。

このときのこの女性は、アレコレ考える余裕はありません。ただ、我が子を救おうという一念だけでした。子供を救って自分の為した行為に自分でも仰天したというわけですが、真性の自分に返ったときは誰もこうした勇気、行為が出るものです。勇気は虚勢や見栄、外見を気にしているときは出ません。偽我のない裸の自分に立ち返ったときに、自然に湧き出るものです。また勇気ある行為は客観的なもので、自分では気づかないものです。

心眼を開く P100

本来の自分自身は神の子の神性の自分である。慈悲と愛の心を持った自分自身です。そうして、神性の自分を確認する物差しが八正道であり、心に法灯をともし、調和の輪を広げていくのは、神の子の当然の義務であり、責任なのです。

心眼を開く P236

各人が、その自覚に立って、五官に左右されない自分自身を確立するにはどうすればよいか、ということになりますが、それには、宇宙の神理である釈迦の正法、八正道を、日々の生活に行じることしかありません。

ウソのつけない己の心に問う、聞く、の生活。つまり正しく、見る、思う、語る、仕事をする、生活する、道に精進する、念ずる、瞑想する、の八つです。瞑想とは反省です。一日をふりかえて、己の心に問う、聞くことです。そうして、人をそした原因は何か、怒った理由はどこにあったか、を反省するのです。すると、自分をかばう心があった、自分のみをいたわる心が強かったということになり、自己保存のむなしさがわかってくるはずです。

心眼を開く P237

八正道には小乗も大乘もないのです。八正道は自分一個の悟りですが、悟りを開けば、進んで、外に出るべきが本筋であり、だいいち、それが人間の仏性でしょう。小乗、大乘にこだわること自体、仏法は末法と化したといっても過言ではありません。

悪霊 I P105

人間にとって、真に安らぎある生活は、中道を根本とした八正道を、心と行ないの物差しとする自力の道しかあり得ないのである。

心の対話 P049

正しさのあり方についていうと、八正道の目的が左右に片寄らない中道にあるわけですから、自分の立場を離れて、常に第三者の立場で、ものを見る、聞く、語るということが大事になってきます。すなわち、正しさの規準は全体との調和ということになります。そうしてその調和は、より高い次元の調和を尺度とすることはいうまでもありません。

反省の要 P008

八正道を行ずるには、その一つ一つの目的を理解し、それにそのような努力、勇気、工夫が必要。

【正見】

正見の目的＝事物の正確な判断、見解を得ることにある。

- ① それにはまず、事象の一切の原因は人の想念（心・意）にあって、現われの世界は結果であることをまず理解する。
- ② 既成観念を白紙に戻し、事物の真実を知るようにする。
- ③ 正見の反対は邪見であり、邪見は邪心によって生ずるので、まず心のわだかまりを除き、常に善意な第三者の立場でモノを見ることが正見の秘訣である。それはまた、八正道の各規範の秘訣でもある。

【正思】

正思の目的＝思うことは物の始まり。あらゆる現象は思うことから始まるので、他を生かす愛の思いが正思の根底。正思は八正道の中なかでも特に重要。

【正語】

正語の目的＝思うことは言葉となる。愛の思いは愛の言葉となる。正語とは愛の言葉。心に愛があれば、言葉以前の言葉が伝わり、相手に正しく伝わるものである。

【正業】

正業の目的＝

- ①魂の修行（転生輪廻）
- ②地上界の調和（職業につき仕事をすることによって他を生かす）
- ③調和の基礎は感謝の心と奉仕の行為（人々に奉仕する）

【正命】

正命の目的＝調和ある精神的、肉体的生活が目的

それには己の長所、短所をよく見究め、カルマと化している原罪（自己保存の想念）を正す努力が必要。

【正進】

正進の目的＝人間関係の調和

夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、社会の人間関係は、愛の理念で貫かれている。

【正念】

正念の目的＝念はエネルギーであり、ものをつくり出し、この地上界にあってはあらゆる原因の根源。

念は目的意識であり、それ故、行為を意味し、他を生かす慈悲と愛の念以外はカルマの温床になる。

邪念と対比して考えると正念の意味が一層明瞭となる。

【正定】

正定の目的＝反省によって心が安定し、やがて不動心が養われてくるが、その不動心を日常生活の中に活かさなくては正定の目的は半減する。

正定はまた、実在界とのもっとも身近な交流の場であり、正定には様々な段階があるが、要は心の調和、安定、智慧の湧現が正定の目的となる。

反省の要 P084

正法の反省、八正道の目的は要約すると、大宇宙を支配する慈悲の心に自分を高め、愛の行為ができる自分をつくり上げることである。別な言葉でいえば、反省と実践は感謝と報恩のめざめ・・・にあるわけである。

・・・生かされている事実を理解し、人びとに報恩の行為が心に抵抗もなく、素直に、やれることが正法の目的である

1. 【正見】

心の発見(神理篇) P172

ものを正しく見る、これが必要である。多くの人々はこの問題について、その人の行為や外見だけで判断する場合が多い。これは誤りである。現象を見るときもそうだ。外見だけでものごとを判断することは避けなくてはならない。

眼は、人生航路の乗り舟の附属品と考えねばならない。客観的に見た現象や印象については、正しい心の眼で判断することが肝要である。

ものごとの原因と結果について、さらに第三者として、己を中道において考察することも必要なことである。また相手の心になって考えることも必要である。

人間釈迦① P111

まず人は、正しく見る目を養うこと。我欲を去った調和ある見解を持つよう努めることであろう。

それには、己という立場があっては、正しさを求めることはできまい。正しさの尺度は、男女の別、老若の別、地位、名誉の別、こうした立場を捨て去って、一個の人間として、大自然の己として、そしてその心の目で、ものを見る、相手を見る、現実を眺めることである。

官職にある者が、ひとたび野に下ると、官職時の感覚とはまるでちがって、会社の利益のために、あとに残った後輩たちを困らせることを平気でやっている。そうかと思うと、ついこの間まで、鬼検事といわれ、恐れられていた人が、一夜にして弁護士に変身し、法廷で主客ところをかえて、弁護に立っている姿を見ると、人の心の所在が、いずこにあるのかわからなくなってくる。

調和の基本は、まず何はさておき見ることの正しい評価にあるといえよう。現れた現象の背後には必ずその現象を映し出す原因がなければならないからだ。また、自分に直接関係のある諸問題が派生したときは、まず自分自身の心の姿を見ることが大事だ。肉体の眼を通して外界の動きを正しくみるためには、その眼の奥にある心眼がキレイに磨かれていないと肉眼に映った諸現象もゆがんでしまうからである。各人の心は鏡である。その想念という鏡をたえず掃除しておくこ

とだ。掃除は反省を通して磨かれてゆくであろう。

心の原点 P118

八正道の冒頭にある「正しく見る」とは、善なる中道の心の眼で見よ。「正しく思う」とは、頭で考えないで、善なる中道の心で考えよ。「正しく語る」とは、善なる中道の心で考えたことを語るようにせよ、といているのである。

心の指針 P096

ものを正しく見るには、まず、自己の立場を捨て第三者の立場でモノを眺めることです。私たちは普通、他人の問題については比較的正確な判断が下せます。ところが、自分の問題となり、利害関係が伴ってくると、是非の判断がつかなくなり、しばしば悔いが残るような結果になるようです。

これは、自分の問題になると、知らぬ間に自己保存が働き、我欲に左右されるからです。正しい判断、正しい見方は、自分を切り離し、いわば第三者の立場でモノを見ることから始まるのです。

そうしてやがてその見方は、心の内面にまで掘り下げられ、これまで正しいと思ったことが、まったく反対であったことがわかります。

たとえば、つい百年前、二百年前まで親の仇打ちは正しいものとされました。仇打ちと聞くと、武士も、町人も、百姓も、その仇打ちに加勢したものです。現代では仇打ちは人殺しになり、殺人罪に問われます。百年前より、ものの見方が前進したといえましょう。

なぜ仇打ちはいけないか。殺人は神の理に反するからです。神の理は地上の調和であり、人びとの目的は、調和の中に生かされているからです。殺人の繰り返しは、不調和を助長します。つまり、作用反作用の振り子は、いつまでたっても止まることがないからです。

今日、個人間のこうした問題は、国が裁いています。ところが国と国の問題になると、調停や、裁くものがないために、戦争にまで発展してしまいます。第四次中東戦争は、昔の個人間の仇打ちにも似た怨念戦争であり、争いは、怨念が消えるまで半永久的に続くでしょう。

戦争が絶えないということは不幸です。多くの人命が失われ、一家は離散します。なぜこうなるのでしょうか。戦争や争いというものは、自分のこと、自国の問題となると、自己保存が働き、自分を守ろう、相手はどうしても自分さえよければ、という考え、見方に傾いてしまうからです。

正見の尺度は神の心なのです。その出発点は第三者の立場で、自分を見、相手を見、なぐめることです。

現象の姿だけをとらえて判断を下しては、間違いのモトになります。現象の奥にかくされた原因を見きわめ、そうして、その原因を取り除く努力が必要なのです。

原因を見出すには反省しかありません。客観的立場に立った反省を通して、その原因をつかみ、捨て去ることです。

正しい見方は、やがて正しい見解をつくってゆくでしょう。そうすると、この現れの世界の、めまぐるしい動きに、いちいち私たちの心を振り回されることがなく、心をいつも平静にしていられるでしょう。

この現象界で起こった、あるいは起こりつつある現象は、すべて原因があって結果として現れてくるものですから、正しい見方が養われてくるにしたがって、現象の奥にかくされた原因をつかむことが容易になるでしょう。

正しい見方は、こうした心の眼を養うことによって高められ、やがて、神の心につながっていくものです。

心眼を開く P177

執着の心がある間は 人間の苦しみ悲しみは消えることがない
執着とは「もの」にとらわれることである
こだわることである

とらわれの原因は生老病死であり それは五官六根を通してつくられてゆく
執着から離れたいと願うなら まずものを正しく見ることからはじめよ
正しく見るためには自己の立場を離れ 客観的な目を養え
そうするとしだいに「もの」の実相が明らかとなり とらわれの心から解脱するようになる

心眼を開く P209

正しく見る事が出来れば 正しく思うことも 語ることも自然に整ってくるものである
決して忘れてはならない。

天使の再来 P038

ものを見る場合に、あなたは、通常どういう立場でこれをみていますか。ただバクゼンと見ますか、それとも、眼の前に映った映像にたいして、疑問を投げ、そして答えを出しますか。人によっては、自分自身の身近かなもの、関心の高いものには注意を向けます。そうでないものには、見向きもしません。それでよいのです。

しかし、その関心の高いもの、身近かなものについて、それではあなたは、これをどのようにみようとしますか。あるいは見てしまいますか。

——例を挙げてみましょう。

一般的な事柄として、新聞の一面に、三面（社会面）に、しばしば大きくとりあげられる東大をはじめとした学生の騒乱事件について、あなたは、これをどのように見ますか。その無暴なふるまいにたいして、あなたは、身ぶるいしますか、怪しからんと考えますか。それとも、現在の社会制度なり、大学制度に欠陥があるのだから、学生が騒さわぐのは当たり前とみましたか。

正しく見る、ということは、次の正しく思うことと非常に関連が出てくるのですが、こうした学生の騒乱にたいして、私共は、そのよってきた原因、結果について、まず、己の心に問うて、正しい、自分自身の見解を持つことです。

正しく見る、ということは、単に、視覚的に、ものを見る、ということではないのです。正確に言えば、心の眼でみよ、ということです。心の眼とは、各人に内在する潜在意識の世界、神性、仏性の世界、守護霊の世界であります。

守護霊の眼は、私共現象界の近視眼的なものたちとちがって、宇宙的な立場、世界的な視野に立って見ているので、現象界に現われた映像を正確にキャッチしてくれます。学生の騒乱にたいして、社会制度、大学制度以前の原因について教えてくれます。制度そのものは、単に、原因が結果となって表面に吹きでる媒体の場合が多いのです。従って縁にふれる以前の原因こそ、正しく見る、ポイントでなければなりません。

ともかく、正しく見る、ということは、心の眼で見よ、ということであります。それには、まず、己の心に問うことが順序であり、正しい見解もそこから自と生れてくるのであります。

心行の言霊 P221

正しさの規準は何かというと、「公平」であるということです。

ではその公平はどのようにして得られるか。

それは、常に段三者の立場に立って、ものを見ることです。自分中心にものを見るからそこに偏見が生まれ、邪見になってゆくのです。

すなわち、正見の反対は邪険です。邪険は心のわだかまりであり、自我我欲、自分中心から生まれます。

心のわだかまりはどのようにして生じて来たのでしょうか。

それは、これまで生活してきた環境、習慣、教育、思想などによって毒されてきたためです。

したがって、ものを正しく見よう、公平に見ようとするには、これまでの既成観念を白紙に戻し、全く、新しい立場から、ものを見るよう努めることです。

(例) 感謝について

年が進むにしたがって、ものに感謝する心が失われてきます。すべてが当たり前で動いており、

感謝や、感動の心は湧いてこなくなります。

しかし、ものに感謝できない心は、もともと、どの辺りから生じてきたのでしょうか。

誰しも子供の時代がありました。子供のときは両親から可愛がられます。両親は子供のいうことなら大抵のことはきいてくれます。近頃は過保護となり、親は子供のこととなると夢中になってしまうようです。

両親は大抵のことはいうことをきいてくれる、わがままを通してくれる、ということから、子供の心は成長するにしがたい、次第に、ものに感謝する心を失ってゆきます。

学業を終え、社会に出て、仕事をするから給料をもらうのは当然だ、課長は係長より余計に給料を取っているから、それだけ働くのは当然だ、ということになってゆきます。

こうして感謝の心は一向に芽生えてこないわけですが、そのもとをたどると、子供の頃のわがままが、大人になってもつづいているからです。

これでは感謝の心がよみがえってきません。

この地上界は、お互いに、助けたり、補い合うことによって成り立っているのですから、感謝の心というものは、人間にとって非常に大事なものになるのです。

感謝は謙虚な心をつくり、やがて、愛の心をも育てるものです。正法の出発、そして終点は、ものに感謝することにあります。

すべてが当たり前で当然という見方をしている「正しくものを見る」ことにはなりません。

大事なことは感謝です。感謝が基礎にないと、ものの見方は偏見を伴ってくるでしょう。

このほか、親子の問題、夫婦の問題、社会生活の問題、いろいろその例題は尽きませが、正しい見方というものは、具体的には現れているさまざまな事柄を深く掘り下げ、物事を正しく認識することから生まれてきます。

公平な見方は、そうした認識から生まれ、正しい見解に至るわけです。

この地上界の事象(現れているさまざまなできごと)は、すべて、人の想念、心の動きから生じており、現れの姿はその結果なのです。ですから、ものごとの原因は、人の心にあるのであって、現れているさまざまな現象は、原因ではなく結果なのです。

したがって、結果だけをとらえ、あれこれ判断すると、間違いのもととなります。まず現れている結果を見たならば、その原因について、掘り下げてゆくことが「正見」のポイントです。

正見の目的は、物事の正確な判断であり、そうして、それにもとづく正しい見解を持つことです。

以上を要約すると、

- 一、まず感謝の心をもつこと。
- 一、事象の一切の原因は人の想念、心にあって、現れの世界は結果である。
- 一、既成観念を白紙にもどし、物事の真実を知るようにする。
- 一、正見の反対は邪見になります。常に第三者の立場に立って、自我の思いを捨て、正しく見る努力をするということになります。

2. 【正思】

心の発見(神理篇) P174

思うということは、考えるということである。見る、聞く、語る、という行為に対しても、まず正しい中道の神理をもとにして、考えなくてはならない。自己本位の考え方は、身を亡ぼす結果を生じるからである。神理である大調和の法則に反するからである。

思うことは、行為につながる。心の動作である。だから不調和な思考は、想念のフィルムに抵抗を造ってしまい、その抵抗は、自分の意識や脳細胞までも狂わしてしまう場合がある。

私達は毎日の生活の中で、自分だけ良く思われようとする心を動かしたり、楽をしようと思ひ他人のことを考えなかつたりする。しかし、真実でない考え方はすべて自己保存の我欲につながっていくことを知るべきである。

自己主張は、自己にもどる。競争相手を蹴落とそうなどという思いは、あの山彦に似て、己に

かえてくるものだ。「馬鹿野郎」といえば、山彦もまた「馬鹿野郎」と自分の声が帰って来るようなものである。

このように不調和な思いを持てば、黒い想念の抵抗を自ら強くして、己自身の苦しみを多くして行くだけのことにはすぎなくなる。相手を陥れて不幸にしようと思う心は、自身の落ちこむ穴を掘っているようなものだ。「策士策におぼれる」の類であり、人を呪わば穴二つ、である。またみだりに情欲について連想することは、心の中では行為につながるようになるものである。正しい自分の心に忠実な考えを持つことが必要だ。

常に他人の幸福を思う心は、行為につながって行けば己にまた帰ってくるものである。悪い考えが己に帰ってくるように、良い原因も循環してくる。

多くの人々への救いの心がやがて行為につながって行けば、常に善なる思いに満ち満ちている生活は、自分自身をより次元の高い姿に磨いて行く。

正しい神理に適う思いが、行為と結びつくような生活、それを実践することが必要である。

家庭内でも姑と嫁の争いをよく耳にするが、姑が嫁に対して厳しいことをいうと、嫁は度重なる叱言に、心から嫌な姑だ、早く死んでしまえば良いと思うようになってくる。そうなると心の黒い想念は現象化され、たとえ口でうまいことをいっても姑の心にひびくものではない。それは心から思っている行為ではないからである。その原因は互いに自分の子ではない自分の親ではない、という自己保存の思いがこのような結果を引き起こすのである。

互いに、神理に適った正しい考えを正しく語り合うことによって誠意をつくすことである。解決はそこにある。

決して人に対して恨んだり、妬んだり、そしったりするような考えを持ってはならない。通じない人々に対しては「哀れな人だ、どうか神よ、救ってやってください。あの人に安らぎを与えてください」と祈ってやる心が必要である。心から正しく思うことは、さらに自分に安らぎを生み、神仏の愛に満ちた光を受けることができるというこれは神理である。

人間釈迦① P112

思うことも、自己中心になると人との衝突はさげられまい。思うことは具象化するからである。親愛の心を持って人に接すれば、人もまたそれに応えてくれるだろうし、食べ物も、食器も、家も、着物も、テーブルも、橋も、馬車も、すべて「思う」ことから出発し発明化している。それゆえ、思うことが自己本位に流れると、人と人との調和を崩し、争いの種をまくことになる。

人間釈迦① P248

五官を通して私たちの心の中に生ずる現象、つまり思う、考えることについても、偏らせてはいけない。思うことは「もの」をつくり出す原動力であり、創造の源であるからだ。心の中で不調和なことを思い、そうして念じて行くと、やがてその不調和を人々に及ぼし、自分にかえてくる。自己の利益だけを思ったり、相手の不幸を決して念ずるようなことがあってはならない。常に円満な、中道の心を持ち、怒り、そしり、ねたみ、うらみ、ぐちることなく、足ることを知った心の状態を心掛ければ、心は光明に満たされ、安らぎの境地に至ることができる。

心の原点 P118

八正道の冒頭にある「正しく見る」とは、善なる中道の心の眼で見よ。「正しく思う」とは、頭で考えないで、善なる中道の心で考えよ。「正しく語る」とは、善なる中道の心で考えたことを語るようにせよ、といているのである。

心の指針 P099

思うとは、考えることです。見る、聞く、語る、の行為の中には、正しい中道の神理をもとにした考えがなくてはなりません。自己本位の考え方は身を滅ぼします。すべては相互に作用し、循環の法にしたがっているため、自己保存の想念は自分にかえてくるからです。

思う、考えることは、行為につながりますから不調和な思いは、想念のフィルムに抵抗をつく

り、その抵抗は、自分の意識や脳細胞までも狂わせてしまいます。

私たちは、毎日の生活の中で、自分だけよく思われよう、楽をしようと考え、他人のことを考えなかったりしますが、これは自己保存の我欲につながっていることを知るべきです。

自己主張も自分にもどるのです。競争相手を蹴落とそうなどという思いは、あの山彦に似て、己にかえってきます。「馬鹿野郎」といえば、山彦もまた「馬鹿野郎」と、自分の声で帰ってきます。

思う、考えることは、創造行為でもあり、自己の運命をよくしたいと思うなら、まず、正しく思うことをしなければなりません。

不調和な思いを持てば、黒い想念の抵抗を自らつくり、苦しみを多くするだけです。相手を陥れて不幸にしようと思う心は、自分の落ち込む穴を掘っているようなもの。「策士、策におぼれる」の類であり、「人を呪わば穴二つ」であります。

また情欲の連想は、心の中で、行為につながります。夢とかあの世の生活では、思ったこと、考えたことが、その結果として、ただちに現れます。現象界においても、心の中で思ったことは、形に現れずにはおかないものです。思うことは行為の前提であるが、実は、行為そのものである、ということを知らなくてはなりません。

昔から姑と嫁の争いを聞きます。姑が嫁にきびしいことをいうと、嫁はたび重なる叱言に心から嫌な姑だ、早く死んでしまえばよいと思うようになってきて、そうなる心黒い想念は現象化され、表面は姑に合わせ、口ではうまいことをいっても、嫁の心にひびくものは、姑に対する憎しみとなり、やがて爆発し、争いになってきます。

子でない、親でないという、お互いのそうした感情が、姑と嫁の関係をいっそう面倒にしています。それというのも、双方の腹の底で、たがいに、よく思われたい、思う通りに家の中をしてゆきたいという自己保存から抜け切れないために、諸々の問題を引き起こしてしまうのです。

正思の重要なことは、正見と同じように、第三者の立場に立って考え、思うことなのです。

相手の立場、相手の幸せを考え、調和を目的とした思いが大事なのです。

誤解や行き過ぎはあらためればよい。話し合って、理解し合うということが調和の大きな前提なのです。

話し合ってもうまくゆかず、自分の非がどうしても認められない場合は、相手のために祈ってやる広い心が必要です。

正道の目的は“心の安らぎ”であり、心の中が、思いが、いつも不安でジメジメしてはなんにもなりません。

相手に通じなければ、広い心で相手を包んでやることです。

もう一つ大事なことは、我慢と忍辱です。この両者は似ているようで大いにちがいます。

我慢とは苦しみ、悲しみを腹の中につめこむことです。自分さえ我慢すれば家の中がまるく収まる、として我慢に我慢を重ねてしまう。我慢は病気をつくります。

忍辱とは、耐え忍ぶことですが、苦しいことを腹につめこまない、話しても相手がわからなければ、相手の心の安らぎを、調和を神に祈るといふ、広く、高い心をいうのです。

私たちは忍辱を学び、我慢を捨てることです。

正思を養うには、これまた反省です。今日一日の考え、思いは正しかったか、正しくなかったかを反省し、過失があれば訂正してゆくことです。

こうしてやがて、中道に適った正思を、心の中に確立することが出来ます。

天使の再来 P039

ものを思う、ものを考える場合の一つの前提は、ものを見ることから始まることが多いようです。その意味で、正しく見るの次に正しく思うことが第二番目に出てまいります。

通常、私共は、ものを思う、ものを考える場合に、大抵は頭を働かすことが多いようです。このため、その判断は、往々にして、自分の都合のいい、我田引水におちいりがちです。

ところが、正しく見るところで説明しましたように、ここでも心に聞くことが大切なのです。

頭は、単に、機械室にすぎません。機械室にいろいろなことを聞こうとするものだから、その

答えは、大抵、自己中心になってしまいます。

私共人間の指令室、つまり、各人の心は、それぞれの目的に応じて、正しい考え方を生み出す中枢機能を持っており、いつ、いかなる場合でもそれ相応の答えを用意しております。このことは、人間の体、精神が、どのような仕組みで組み立てられているかを知れば、一目瞭然であります。

しかし、普通は、心に聞く、心に反省するとは具体的にどういうことか、という疑問が湧いてまいりますので、この点について説明しますと、まず、日中、カンカン照っている太陽を思い出して下さい。太陽は、善人にも、悪人にも差別なく、その光を惜しげもなく与えてくれます。太陽がもしもこの世に存在しないとすれば、地球はまさしく死の世界でありましょう。この意味で太陽は地上の生きとし生きる者の絶対の存在であり、慈悲と愛の存在でもあります。その太陽が、各人の体内にも等しく、内在しております。地球から見た場合、太陽は、東から西に没するように、常に、自然の法則にそって、しかも、中正を守って、決して、その軌道から外れません。その太陽こそ、各人の心です。心に聞くということは、我が身にある太陽に聞くことであります。自然から外れぬあの太陽を思い出しながら、考える、そして反省するとすれば、その答えは、必ずや自然にそった、正しい、ものとなる筈です。少なくとも、我田引水になったり、ご都合主義におちいることはないと思います。自分をいったん切り離し、客観的に、自分を見直すという立場が生じてまいります。

正しく思う、とは以上のような意味であります。

心行の言霊 P226

正しく思えないのは、正見でみたように、自分の心にわだかまりがあるからです。

怒りや憎しみ、しっと、愚痴、欲望がありますと、心がそれにほんろうされ、正しくものを思うことができなくなります。

正しい思いとは、慈悲と愛しかありません。

これ以外の思いは、すべて、自我からきています。

怒りの感情や本能的な欲望、また知におぼれると、冷たい人間になってゆきます。

理性は経験を基礎としていますが、経験だけに頼り、ものを知る知性の働きを無視すると、人を納得させる深い智慧は浮んできません。

意志は、弱くても、強すぎても困ります。弱ければ、くるくる変わるし、強いと頑固者になります。はがねのような、強靱な意志は、心の機能が全体的に働き、十分にゆきわたって、はじめて、その力を発揮します。

心が丸く、大きく、豊かであるということは、まず、正しく思うことから、出発します。物事の始まりは、まず、思うことからスタートを切ります。

この大宇宙も、神の意思、つまり、思うことから始まりました。

人間の生活も、思うことから、始まります。

ただ人間は、五体を持ち、眼でものを見ることによって、「思う」ことが機能化するので、八正道も、正見、正思という順序になっていますが、本来は、心が主体であり、一切の創造行為は、すべて、思うこと、考えることから生まれるものです。

人の思いは、意心伝心といって、すぐさま人に伝わります。またあの世に対しても、同じように伝わります。

慈悲と愛の思いは、天上界につながり、憎しみ、怒りの思いは地獄界に通じてゆきます。

病氣、災難、さまざまな不幸の原因は、正しく思わない自己本位に、心がゆれているから起こるのです。

正しく思うことは、正念と密接に関係し、特に重要ですので、正念と合わせて理解して下さい。

正見、正思の目的は、慈悲と愛を根底にした中道の思いにあります。

善の思いには善が返ってきます。

悪の思いには悪が返ってきます。

思いはものを創造する行為です。他を生かし助け合う、正しく思うことがあなたを調和させ、

人々を調和させる根本です。

3. 【正語】

心の発見(神理篇) P172

語るということは、言魂となって、相手に伝わるということである。表現された私達の言葉は、相手の耳を通して不調和か調和か、いずれかの現象を生じさせるものである。

すぎたお世辞や、横暴な語り方は人の心を傷つける。その原因は、結果となって自分にはねかえってくる。言葉は、少なすぎても多すぎても、自分の意志を正しく人に伝えることはできない。

良く自分の心に問い、自分が相手の心になって語り合うことが必要である。強い言葉は相手の心に不調和を呼ぶものである。

良く自動車の運転手などが怒鳴り合っていることがある。かりに相手が怒鳴っても、自分が正しいと第三者の立場で考えてから結論が出て、反発をしてはならない。

反発の心は自己保存であり、自己中心の考え方である。このようなときこそ、正しく語り合わなければならない。争うことは、不調和な原因を作り出すことになるからである。

相手が怒っても、善悪を良く判断して、心を動かしてはならない。正しい納得の上で心を調和することである。怒った心は怒った人の心に帰って行くものだからだ。

そのように、「語る」ということは、自分と相手の意志とが交流することなのである。優しい言葉から受ける感じと、はげしい語気でいわれたときの感じでは非常に異なるものである。

やはり受ける、与える感じの良い方法の中に調和は生まれてくるのである。どのような誹謗もそしりも、怒りも、心を動かさずに聞き流してしまえば、その言霊は、不調和な言動者に帰るといふことだ。

しかし、なぜそのようにいわれるのかということも、反省しなくてはならない。もしいわれる原因のないときは「哀れな人だ」と相手を思いやれば良い。そして「どうか神よ、あの人の心に安らぎを与えてください」と祈ることだ。その心はすでに菩薩心の現われなのだ。

人間釈迦① P112

ヒョウタンから駒が……という古人の経験的な教訓は、一面の真実を語っている。相手を見下す言葉、野卑な言葉を使っていると、いつしかその言葉に自分の心までが犯され、相手の心を刺激し、争いの原因をつくる。言葉は言魂であり、生きた波動である。謙虚な言葉、いつくしむ言葉、優しい言葉、勇気ある言葉、思いやりの言葉など、正しく語ることの重要性は、人間が社会生活を営むかぎり、絶体に欠くことのできない要件の一つである。

心の原点 P118

八正道の冒頭にある「正しく見る」とは、善なる中道の心の眼で見よ。「正しく思う」とは、頭で考えないで、善なる中道の心で考えよ。「正しく語る」とは、善なる中道の心で考えたことを語るようにせよ、といているのである。

心の指針 P102

言葉は言魂といって、相手に伝わります。ですから表現された私たちの言葉は、相手の耳を通して不調和か、調和か、いずれかの現象を生じさせるものです。

言魂とは、光と音の波動を意味します。

私たちの心、肉体は光から出来ています。音の波動も、また、光の波として空間に振動して行きます。

心からの言葉は、そのまま、光の波動となって伝わってゆきますが、すぎたお世辞や、横暴な語り方は、光の波動に黒い塊りを付着させているため、相手の心を傷つけます。傷つけた結果は、自分にはねかえってくるのです。

ですから、言葉は、素直な心で、相手の心になって語り合うことが大切です。語調の強い言葉

は、相手の心に不調和を与えるだけです。

売り言葉に買い言葉で、町中や電車の中で口論している人がよくあります。たがいに、黒い塊りを発散させ、それを食べ合っている。心に黒い塊りをつくり出し、拡大させています。

こうしたことを年中やっていると、病気や怪我をします。心がいつも不安定になっているからです。

相手が怒鳴っても、決して反発をしてはいけません。反発は自己保存であり、反発する前に、自分を第三者の立場で見、考えてから結論を出しても遅くはないからです。

怒った心は怒った人の心に帰って行くものであり、これに心を動かしてはなりません。

第三者の立場に立って反省し、いわれなきものであれば「哀れな人だ」と相手を思いやればよいのです。そして、「神よ、あの人の心に安らぎを与えてください」と祈ることです。

言葉は自分と相手の意志の交流です。

それだけに、常に調和ある言葉を心掛け、調和ある対人関係をつくるようにしなければなりません。

言葉は、人によって受け取り方がちがって来ます。お年寄りに英語を交えたり、若い人に古い話を持ち出し、長々と語られると戸惑ってしまいます。

「人を見て法を説け」なのです。

天使の再来 P041

言葉は、日常生活に欠くことの出来ぬ流通機能であります。もしも、この人間世界に、言葉という意思伝達機能がないとすればこの世は暗黒になっていたであらうでしょう。幸いにして、人間社会には言葉があり、この言葉によって、人と人との意思の交流がスムーズに行なわれ、調和が保てます。

聖書の中にも、^{はじめ} ^{ことば}太初に言（神の意思）ありき、と記してある通り、言葉は人間の生命でもあり、言葉は神そのものでもあります。

そのために、正しく語ることの重要性があらためて認識されます。

近頃、若い人達の間で、その言葉が乱用され、相手が目上であろうと、先輩であろうと、勝手気儘に使われています。上長、先輩にたいしては敬語を使って、相手の心になって、不調和を起さぬよう心掛けることが必要であります。

大事なことは、その言葉も、頭で判断せずに、自分の心に問うてから相手に正しく語ることであります。

言葉にも生命があるということは、普通、言魂といって、言葉は神仏そのものであり、光のバイブレーションであるからです。心から出た言葉は光そのものになってみえます。ところが、黒い想念で発せられた言葉は、黒い塊りとなって相手の心を毒します。しかもその毒した塊りは再び自分に還り、還ってきた時は、雪だるまと同じように、二倍、三倍の大きさになって還ってきます。光の場合も同様です。従って、売り言葉に買い言葉で、感情に支配され、年中こうしたやり取りをやっていると、いつしかその人は病にたおれます。これは法則です。

よくよく気をつけねばなりません。

心行の言霊 P231

通常は、思うこと、考えることは言葉になって伝わります。

言葉は言魂といって、光の波動であり、光の粒子ですから、その粒子を黒い想念で汚してはならないのです。

怒りで感情がふくれ上がりますと、言葉はつい荒くなり、相手にも悪感情をいだかせることになります。つまり光の粒子に黒い想念を付着させるからです。

それ故、正思を根底にして語ることの重要性がわかります。

言葉が足りない、言葉がすぎる、というのは、しばしば感情が入るからです。

また、誤解や不信が生じるとすれば、それは心の底に慈愛がないからです。

慈愛を根底として言葉を発するようにしていれば、誤解や不信というものはおこらず、かりに、

不足の言葉があっても、相手が補ってくれることでしょ。

そうした経験は、おそらく誰もがしていると思います。

言葉は、意志の疎通に欠くことのできない重要な機能ですが、心に愛があれば言葉以前の言葉が相手に伝わり、こちらの意志が正しく伝わってゆくものです。

心に法ありて P010

八正道の中に「正語」というのがある。

これは冷静、誠実、愛の心をもって語れということなのだ。心を歪んだままにしておいて語れば、その言葉は、人の心を動揺させ、混乱のモトになるからである。

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」と言うと、水は、水と空とに分けられた。

これは旧約聖書に出てくる創世記の冒頭のくだりである。天地創造は、神のこうした言葉によって完成された。

これは何を意味するかといえば、言葉は神であり、言葉は生きており、言葉は、ものを創造する力を持っていることをいうのである。

人の中傷をしたとする。すると、第三者はその中傷に心を動かされ、中傷されている人を色メガネで見るようになる。しかも、人の口は、それこそ、自由に語られるので、言葉は生き物として、人の心を動揺させ、人から人へ中傷が伝えられると、混乱は、一層深くなってゆく。

善悪にかかわらず、言葉は、それ自体、生き物として生き、ものを形造って行く。憎悪の言葉、中傷の言葉、怒り、愚痴、さまざまな悪の言葉、すなわち、人心を混乱に導く言葉は、神がつくられたこの地上を、悪の毒で汚すことになる。

悪の言葉を語るそのときは、悪魔がかたわらにいて、その人をそそのかしている。

過日、関西での研修会の折に、悪魔に心を乱された人がいた。一部の人びとは、その人の言葉を信じ、心が揺れた。悪魔に乱されたその人は、わずかばかりの霊力や自分の能力を過信し、増上慢になっていた。そのため、本来の自分を見失い、自分は真実を語っているかのような錯覚に陥り、苦悩をつくった。幸い、大事に至らず、本人も、そして、その周囲も、平静を取り戻すことができたが、私たちの周囲には、たえず魔の波動が送られ、極めて巧妙なうちに私たちの心の中にすべりこんでくる。そうして、言葉を通して、人の心を 混乱に陥れる。

忘れてはならない。私たちが平常心を失い、心が不安になり、人を憎んだり、気が滅入ったりしたときは、心を落ち着かせ、平常心に戻るまで、みだりに語ってはならない。言葉は、それ自体、生き物として、人の心を動かし、人びとの行動を規制するからである。

4. 【正業】

心の発見(神理篇) P176

この現象界における修行は、物質、経済の場である。

過去における修行者達は現代のように物質経済文明の進歩の早い環境ではなかったから、生活条件もゆるやかであった。しかし、権力者により多大な犠牲を払ったり、戦争というような不調和に、心の安らぎは常に得られなかった。それだけに、安らぎを求める人々も多かったのである。

状況は異なるが、現代も己の心を失っている人々は多い。生活の智恵から生じている物質文明に押し流されてである。しかし私達は、生活の基盤を放棄することはできない。物質経済の根本は失うことはできない。生きていられなくなる。

そうした中で、与えられた仕事こそ天職であり、そのために生命の保存ができるのであるから、努力して、成果を上げなくてはならないのである。

生活のための仕事に対して、不平不満の心が存在することは、すでに感謝の心を失っているからである。もちろん正しい努力の結果に対しては、報酬の基準が、生活経済との調和の上に成り立つべきである。生活環境における基準の調和が崩れている場合は、己の心と良く相談し、生活できる経済の確立を、計らなくてはならない。

自己保存のみによる物質経済の独占は、必ず心の不調和を起し、これが原因となり他の生活環境にも不調和な結果を作り上げてしまうことになるのである。あくまでも大衆の調和を根底にした正しい仕事に専念することが、本当の修行である。その仕事にしても、社会の人々に貢献できる目的を持った、正しい仕事を私達は修業の目的としても行なわなければならない。

まして、集団の指導者でもある事業体の責任者は、自我我欲を捨て、従業員を幸福にするための目的を根底にして、労使協調の心を果たすことが必要であり、事業はその心によって発展し、不朽の事業にもなり得るのである。

新製品の開発にしても、心を悟った行ないの中から、その研究努力に対し、より以上の靈感が与えられるというものである。

現代社会における労使の闘争は、不自然である。資本家も労働者も、物質的、経済的な考えのみで、人間として、神の子としての尊厳を失っている。資本家は経済観念の上に、より次元の高い心を悟り、自己利益の追求の仕事に終始しないことである。利益は労働力によって得られるのであるから、やはり報恩の心はその労働力に対して感謝の心を示さなくてはならない。

感謝の心の表現は、生活の安定を保証することである。

また労働力の提供者は、正しい仕事の提供者に対して報恩感謝の印として、仕事に専念し、己に足ることを知った生活の基盤を築かなくてはならない。労使協調の精神は、闘争を根底にした協調であってはならないのである。

働いた金を当然のごとくもぎ取ろうとする心、行為はすでに正しい仕事とはいえない。賃上げ交渉にしても、本来相互理解を根本とすべきである。相互の心からの話し合いが、正しい神理なのである。

現代社会の歪みは、資本家も労働提供者もともに正すべきであるし、ともに心という内面を、より正しい神理によって開発することが第一歩である。

人間釈迦① P113

「仕事」は、自らの生活を助けると同時に、人々の生活にうるおいをもたらすものである。健康で、快活に仕事ができるのは、自然の恵みと、人々の協力の賜であろう。正しく仕事をするには、まず感謝の心が大事であろう。そうして、その感謝の心は、報恩という布施の行為となって実を結ぶものであろう。地上の調和は、この「仕事」に対する心構えによって大分ちがってこよう。感謝と報恩を軸として、勇気と努力、それに智慧が三位一体となって働くときに、この地上はよりいっそうの豊かさをましてこよう。

人間釈迦① P225

社会は、分業という形態をとり維持されている。遊んで暮らすことを許さない。百姓は野菜や米をつくる。商工業者は、その商品売って生活する。それぞれが持場を守って、正しく仕事に精進することが、社会生活の基本的なルールである。商人や工業者、為政者が、欲につられて、正しく精進することを忘れて、なまけ者が出てくると、全体のバランスを失い、貧富の差が激しくなってくる。生産をあげることだけが仕事ではないし、独占は、もっとも大きな弊害を伴うものだ。また、医者は病人を癒し、法律家は社会秩序を守るための番人でもあった。

人生の価値は、その与えられた職場や環境を通して、調和という神の心、人間生活をより豊かにする魂の進化に、どれほど貢献したかにかかっている。したがって仕事や環境は、いわば、魂進化のための手段にすぎず、これにおぼれてはならないのであった。

人間釈迦① P249

自ら選び、与えられたその職業は、それはそのまま天職であり、その仕事を通して、人生を学習してゆく。仕事、職業は、人生経験を豊かにする新しい学習の場であることを忘れてはならない。職業は、人々が生きて行く上の相互依存の大事な場であり、したがって、健康で働けることに感謝しなければならない。感謝は報恩となって実を結ぶ。百姓たちが野良に出て精を出し、収穫を得ることによって家計が保たれる。報恩とは余ったものを人々に布施することだ。困ってい

る人々を見て、みぬふりをし、自己保存に耽る心は、自らが苦しみの種を蒔いていることになる。仕事といっても、他に害を及ぼす仕事は正しいとはいえない。

人間釈迦② P097

出家者が民族的に集団化されてくれば、相互扶助の生活環境を疲弊させてしまうだろう。八正道の正業とは、そうした意味で意義をともなってくるものであり、正業の一つの目的が相互扶助という調和と生活環境の豊かさを求めるものでなければならない。

人間釈迦③ P262

仕事についても、正しく仕事をするのが、大事になって来ます。

毎日の仕事も、修行の大切な過程であり、偽りもなく、愚痴もなく、怒りもなく、生きてゆくための手段であることを知らなくてはならないでしょう。健康なるがゆえに、正しく仕事をするのが可能であり、仕事のできる環境に感謝することが大事なことだといえましょう。

原説般若心経 P170

人間としてこの現象界に生まれたならば、生きるために仕事をしなければならないはず。万物の靈長である人間は、本能のままに生きるべきではありません。

人間は考えを実行することのできる、偉大な智慧の持主なのです。自らの生活を豊かにし、社会人類の幸福を作り出すためにも正しい仕事をするのが大切です。それに害毒を流すような仕事は、自らを亡ぼすとともに、善意の人々をも傷つける結果になるからです。

働く環境に感謝し、その心は報恩としての行為に結ばれなくてはならない。円満な心を作るためには欠くことのできないそれぞれの特技を生かした、正しい仕事をするのが大事だといえましょう。

心の原点 P118

「正しく仕事をなす」ということは、与えられたその職務に対して、忠実に、義務と責任を果たすということである。

この場合の仕事とは、単に表面的に、量的に人より多くなしたということよりも、人々の幸福を願い、働く環境そして提供者に感謝し、その感謝の心を、行為によって報いるということなのだ。

働く環境を提供している人々は、また働く人々に感謝の心を持ち、相互に、より良い生活の安定と、心の調和をはかり、報い合うことが大切なのである。

そして、自らの義務と責任を果たすこと。

たとえば、仕事の量は少なくとも、心から出た奉仕の行ないのほうが、神はより以上に喜ぶだろう。

なぜなら、この世は、魂の修行のためにあるのであり、仕事そのものは、魂の修行の材料にすぎないのである。

むしろ、質と量が、相ともなえば、これに越したことはないだろう。

しかし、神仏の眼は、あくまでその質に重点をおいていることを、私達は忘れてはならないだろう。

昔から、長者の万灯より、貧者の一灯という言葉がある。心からの行為、それをいったものだ。

資本主義もマルクス主義も、物質と経済が基準になっているため、心はない。

私達の本当の幸せは、果たして経済だけであろうか。

経済だけに幸せがあると考えている人々は、本当に、心の貧しい人間である。

人間が造り出した貨幣経済というものが、いろいろ不安定な問題を投げかけているという事実から、私達は眼を避けてはならない。そして、その事実から、真実の幸福とはどこにあるかを考えなければいけないのだ。富ばかりが人生ではない。

心の指針 P104

私たちのこの地上での目的は、魂を磨くことと、仏国土ユートピアを造ることです。

正業とは、この目的に適ったものでなければなりません。

感謝と奉仕、そして、より大きく、豊かな心と魂をつくる場が仕事のはずです。

こう考えますと、正業の在り方はまず心を豊かにすることにあり、仕事は己の魂の経験の範囲を広げてゆくことになります。

ペテロはイエス・キリストの第一の弟子として後世に名を遺しましたが、そのペテロは、当時は漁師でありました。学問に縁が薄かったために、伝道には随分と苦勞しました。そこで今世は学問をみっちり学び、魂の経験を広げてゆこうと、今世は学者の道を志したのです。元東大総長の故矢内原忠雄氏が、かつてのペテロであったのです。

こういう人はそんなバカなど、いかにも知れませんが、同氏が書き遺した「イエス伝」を見れば、当時の経験がなければ書けないような個所が随所に見られます。

このほか現代の著名人の中には歴史上に名をつらねた人がおり、あの人こんな仕事を、という例が非常に多い。

普通は前世の職業が今世につながっている人もありますが、百八十度ちがった職業を持って今世を送る人も多いのです。

このように職業を通して、己の魂の経験をより豊かにし、広い心を養うことが正業の第一の目的なのです。

第二の在り方は、職業を通して、人びととの調和をはかることです。自分を含め、人びとの生活を守ってゆくことにあります。

南方の原住民のように、一から十まで自給自足をする時代は過ぎました。しかし原住民でさえ、男女の役割が決まっており、男は狩りに、女は子供と食事の用意をするように、やはりそれぞれの分担があるようです。何もかも一人で生きることは、事実上不可能ですし、社会生活という永続性を持った生活は一人では期待できません。それぞれが持ち場を守り、その分を果たすことによって自分も生かされ、他をも生かすことになるのです。

職業に就くということは、自分を生かすばかりか、他の人びととの協同生活に欠かせない役割なのです。

私たちの肉体の機能を見ても、心臓は心臓として、胃腸は胃腸の働きを果たすことによって体は維持されます。心臓や胃腸が勝手に動き、持場を放棄すれば、私たちの肉体は一日として保つことは出来ません。

職業とはこのように、自分を生かし、他をも生かす大事な場です。

第三の在り方は、奉仕です。

私たちが健康で働ける環境にあるということは、自分を生かし、さらに他をも生かす原動力となるものです。

職業の第一の目的が魂の経験の範囲を広げてゆくことにあれば、健康で働けることは神の偉大な慈悲があるからであり、感謝と報恩の行為こそ正業の第三の在り方のはずです。

こうみてまいりますと、職業の在り方、仕事の目的がハッキリしてきたと思います。ところが現実はどうでしょうか。利益のためなら人を押しのけても無理押しする。公害が出ようが、人が苦しいのが、最少の費用で最大の利益を挙げる、それが企業目的になっています。

消費は最大の美德とかいって、地球資源の乱獲に狂奔し、将来の人類の生存のことなどあまり考えずに、儲かればいい、自分さえよければよいというのがこれまでの企業精神のようでした。

さらには労使の争い。労働者も人の子、食べるだけよこせと経営者に迫る。賃金と物価は二ワトリ・卵の論議のごとく、年々エスカレートし、労働者の生活福祉を目的とした組合運動は、ここへ来てようやく反省期に入ろうとしています。

経営者と労働者の対立は、やがて経済全体のバランスを失う要因をはらんでいます。

企業エゴ、個人エゴが正業からみた場合、いかに人類全体の破壊行為につながるか、魂の前進にブレーキをかけているかが、これで明らかになるでしょう。

物を主体にしたものの考え方は、必ず破壊につながってゆきます。

心を中心とした物心両面の考え方こそ、私たち人類の調和の基礎でなければなりませんし、人類が永遠の平和を望みたいならば、ウソのいえないその心を大事にし、その心をもとにした生活が大事なのです。

心の対話 P182

転生の過程においては、必ずしもその能力に合った仕事をするとはかぎりません。自分の心をより豊かにするために、これまで経験もしない仕事に就くこともあります。

そうして、その仕事を通して人生の目的と意義とを発見し、全体の調和に役立ててゆくのです。

仕事＝職業というものは、己の魂をより大きく豊かに育てるための媒体です。職業そのもの、仕事そのものに目的があるわけではありません。

またたいいの人は多くの人びとに迎えられ、地上の喝采に心を奪われますが、神の意思と地上の喝采とは必ずしも一致しません。人びとの喝采には好き嫌いの感情があるでしょう。

群集心理の作用もあります。風俗習慣、その時々思想など、さまざまな要因がからみ合って、地上の喝采は生れてくるものです。つまり地上の喝采には不純なものが非常に多いということです。

心の対話 P190

男子であれば誰しも生涯の仕事を発見し、そうした仕事に打ち込みたいと願うのは当然です。仕事はやはり男子の生きがいであり、仕事が中途半端になりますと、生活が乱れ、家庭や周囲を不幸にしてしまいます。

ところで、仕事はなんのためにするのか。仕事のための仕事か、生活のための仕事なのか、それとも自己満足のそれなのかということですが、根本的には、まず己の魂を磨き、より豊かな広い心をつくり上げていくことであり、第二には、仕事に励むことによって全体の調和をはかる。三番目はその調和をはかるために、仕事を通して人びとに奉仕するということです。

この三つの事柄について、細かく説明するスペースがありませんので省略しますが、仕事に執着を持ったり、仕事の鬼になったり、好き嫌いの感情が先に走ることは、正業（正しく仕事をなす）の精神から見ると、相反するわけです。

生活のために生涯の仕事に就けないという悩みは、たいいの人は一度は通過しなければならない関門のようです。早くから自分の才能が発見され、その才能を生かせる人はごくマシだからです。また、早くから才能が発見されたといっても、晩年、不遇のうちに世を終える人もあります。

元来、才能というものは、自分の意にかなっていないと思われていても、現在の仕事に励むことによって、その仕事のなかから生まれてくるものであり、生涯の仕事は、そうしたところからしばしば発見されるものです。現在の仕事をおろそかにする者は、生涯の仕事に就くことすらできないでしょう。なすべきことをなしていると、その仕事が不向きであれば、やがて、自分に向いた仕事に就くチャンスがめぐって来ます。あせらず、怠らず、現在を正しく生きることです。

天使の再来 P042

まず第一に、与えられた仕事に責任を持つこと。第二は、他に迷惑をかけないこと。第三に、万物は神のものであり、いやしくもこれを独占するようなことがあってはなりません。第四は、万人のための正しい行為ということが重要でありましょう。

仕事というと、いかにも一つの作業行為ということが連想されますが、この場合の仕事とはそうした作業を含めた、作業を通じた人間行為の在り方を、ここではいっているのです。

従って、第一と第二は、これは当り前のことではありますが、第三と第四については、説明を要しましょう。

まず、万物は神のもの、という意味ですが、これは、般若心経の色即是空、空即是色の例がもっとも分かりやすいと思います。色とは、現実社会、この現われの世界、現象界を指していいいます。空とは、実在の世界、つまり、あの世であります。人によっては、あの世はないと思っておりま

すが、あの世は、今も昔もかわりなく、実際にあります。むしろ、あの世こそ、本当の世界、本当の社会ですから実在界ともいいます。そこで、色即是空とは、この現象界は、実在界の投映、つまり、現象界という言葉は、象の世界、形の世界、写し出された世界、映画のスクリーンという意味ですから、その本元、映画のフィルムは、あの世にあるのだ、といているのです。

次の空即是色とは、それ故に、この現象界は、眼に見え、体にふれて、いかにも、実際に、ものが実在するかのように感じますが、本当は、あの世から写し出された世界でありますから、ある年月が立つと消えてなくなってしまうものだといっているのです。かつて栄えたローマの都もギリシャの文明も、今日では、その形骸をとどめるのみであり、現象世界の浮き沈みを物語るよき参考資料といっていでしょう。

このように、現象界はまことにはかなく、無情であります。現象界が実在界の投映であり、本来、あるように見えていてなにもない、本家本元は、実在界、空の世界、心の世界にあって、それは又、見方を変えれば、心の世界は神仏の世界でありますから、現象界に写し出された諸々のものは、「神仏のもの」という考え方が成り立つと思います。

私達の生活は、このように、実在界から一時お預りして、成り立っているわけですから、いやしくも、これらの物を独占するようなことがあっては、ならないということでもあります。

第四の万人のための正しい行為というのは、こうした空即是色の考え方に立てば、その作業行為も、おのずと慈悲と愛の中から自然発生的に生れ出てくると思います。この世は魂の修行の場であり、そのうえ、なにもない世界でありますから、仕事の量がその人の価値を決定するものではなく、仕事を通じて、己の心が、神仏にどう調和されたか、万人のための仕事として為し得たかどうか、万人のための調和にどう寄与したかが、その人にとって、重要な位置づけとなるのであります。

心行の言霊 P233

地上界のあらゆる生物は、働くように仕組まれています。動物も植物も、そして、鉱物さえも、この地上の生きとし生けるものに、その体を提供しています。

人間の場合も、その点は老若男女を問いません。幼児は乳をのみ、眠ることが勤めです。それによってやがて、成人し、次代を背負う、大事な働き手となるのです。

学生は学校で学問を学び、社会人は社会のために働きます。

主婦は家庭にあって子供を守り、夫の仕事が円滑にゆくよう、安らぎの場を与えるものです。

安らぎの安の字は、ウ(ウかんむり)に、女と書きます。ウはもともと家のウからきており、そのウに女が加わると、安、つまり、その周囲は安らぎとなるのです。

男は、田と力が合わさって男となります。男は外に出て田畑で仕事に精を出す。女は、家庭にあって安らぎの場を提供します。

男性が女性に美を求めるのは、美は安らぎの象徴であり、女性が男性に求めるもの、力は、たくましさの象徴だからです。

男女の性が、それぞれ機能するところによって、人間社会は円滑に回転します。

働くということは、人間としての義務であります。同時に、職業に就き働くということは、人びとに必要なものを提供することを意味します。職業のない者、働くことの必要のない者は一人もいないはずで。

今日の社会生活はそれぞれがその業務を分け合い、たがいに、その生活を補い合い、助け合っています。すなわち、分業化によって、それぞれの生活を支えているというのが実情です。

私たちが仕事をし働くということは自らの生活を維持し、人びとの生活を支えることです。ですから、それは愛の行為につながるのです。

愛は他を生かすことであり、助け合うことです。

仕事をし、働くことは他を生かすことですから、愛の行為なのです。

仕事をし、職業に就くことが愛の行為にもかかわらず、社会がこのように混乱するのは、仕事を単に金儲けの手段と考え、人はどうしても自分さえよければいいと思うのが、原因です。

ですから、今日の多くの人びとは正しく仕事をしているとはいえないでしょう。

正業の在り方は、この地上界の調和に役立てることであり、その基礎は愛であり、奉仕の心なのです。

戦後の企業は労使の対立が深まり、常に争いと混乱が絶えません。一部の指導者や扇動者は、文明の発達と社会の進歩は、こうした闘争の中から生まれるとみています。が、とんでもないことです。

人間は、文明や科学技術のドレイではありません。人間のための文明や社会の進歩であって、進歩のために人間があるのではありません。

闘争はどこまでいっても闘争であり、平和はきません。平和のない文明ならそんな文明は必要ありません。

労使の対立が激しい企業ほど不調和であり、やがて倒産へと発展してゆきます。企業が倒産すれば労使ともども生活に困り、家族は路頭にさ迷うことになります。

労使の対立はどうして起こるか、それは、組合も使用者もたがいに自己主張してゆずらず、それぞれが自己保存の中に埋没しているからです。使用者はできるだけ賃金を払うまいとし、労働者はより以上の賃金を獲得しようとします。これでは両者の争いはエスカレートせざるを得ません。

労使が裸になり、常に対話の姿勢を持つならば、こうした争いというものは起きません。

経済社会がどんなに合理化されたとしても、お互いに汗して働かなければ、生活に必要な物、つまり衣・食・住は得られないのです。

経済の合理化とは分配の公平にあるわけですが、分配の公平はまず人間尊重の対話からであり、対話の前提は自己保存による自己主張をまず捨て、人間本来の目的と使命を自覚したところからはじまります。物事は対立を通しては、決して満足な結果は得られません。

こうした意味で、まず、人間とは何か、人間はどこから来てどこへ行くのか、ということを理解することが必要です。

人間は経済のドレイではありません。

人間は己の魂を磨くために、この世に生まれてきています。

それぞれの職業、役割というものは、そのときどきの自分の魂を磨く材料、環境であるということを知る必要があるでしょう。

すでに、これまで既述してきたように、人間の魂は転生を輪廻し、あるときは王として、君臨し、あるときは一介の農夫で身を粉にして働き、あるときは医者として人びとを救って来ました。そうして今世は一介の労働者であり、経営者の立場に立っているわけであり、そうした立場は、己の魂をより広く、豊かに育ててゆくためのものであり、対立や争いにあるのではないのです。

人間はみな兄弟であり、友です。

こうなりますと、一つのパイ(物)をめぐって相争うことの愚が理解され、互いに愛をもって、助け合う、他を生かすことの意義を見出すことでしょう。

こうした意味から正業とは、次の三つの目的から成り立っています。

- 一、魂の修行
- 一、地上界の調和
- 一、奉仕

すなわち、人間の魂〈心〉は転生を輪廻して行くものですから、現在の環境、立場は自分の魂を磨いてゆく修行の場です。

地上界の調和とは、そこに住む人びと、それぞれが、職業を持ち働き、自分の生活を保持し、人びとの生活を維持するということなのです。つまり、働くことは地上の調和に役立っているわけです。

次に、その調和というものは、各人が人びとに奉仕するという愛の心が根底になければなりませんし、調和は愛の心によって支えられるわけです。

心に法ありて P003

経済は人間生活の手段であって、目的ではない。我々の目的は、仕事を通して、その魂をより

豊かに、広く磨くことであり、そうして、その心を地上に反映させることにある。すなわち、他を生かす愛の仏国土をつくることである。現在の危機は、その反作用というべきであろう。

正法と経済 P008

正業とは、正しく仕事をするをいう。

私達の仕事は生活と直結し、仕事と生活というものを切り離して考える事が出来ない。したがって正業の在り方は、そのまま、生活の在り方にもつながって来よう。

また、今日の経済社会が利潤追及のシステムの上に組み立てられ、神の子である人間の目的からすると、これはまったくの反対行動であり、そうした意味からも、正業の在り方は、私達人間の一日における生活活動全体を規制するということにもなってくるだろう。

正業には三つの目的が秘められている。

己の魂を豊かにする

調和

奉仕

の三つである。

まず、一について説明しよう。

私達は次元の異なるあの世からこの世に出生してくるときには、一人も例外もなく、こんどは医者になって病に苦しむ人びとを救ってこよう、あるいは商人となってさまざまな財を人びとに分け与えてこようというて出生する。

出生の目的は人生の経験を、職業を通して、仕事を通して積んでいくのである。

経験は魂の輪を広げ、心を豊かにして行くものである。

私達は経験のないものを理解することは困難である。

善の素晴らしさ、悪の醜さというものは自分に経験がないと本当に知ることが出来ない。

人殺しや犯罪者の心理状態は、これらを経験しないと理解できないかということ、本当は理解出来ないものなのだ。

自分がその局面に立たされ、追われる身となって、世間をはばかった生活をすることによって、はじめて悪の愚かしさ、悲しさ、醜さを知ることが出来よう。

人間はもともと集団の中で互いに手を取り合って生活して行くように仕組まれている。世間をせまくした孤独の生活というものには人間は堪えられないのである。

宗教や哲学に興味を抱く人々の魂は、たいていはこうした人生の明暗の生活をくぐり抜けて来た人々が多いといえよう。

いうなれば、魂の経験が多く、さまざまな仕事を通して現在ここに立っているからである。もちろんその経験というものは、何も今生のそれをいうのではない。長い転生輪廻の過程において、そうした経験が、ものの真実に近づき、人間に対する理解に度合いを深め善に喜びを見出すことが出来るようになるのである。

私達の身近な五十年、七十年の人生についても、そのことが言えるのではないだろうか。

人生経験の乏しい小学校一年生に、四十代、五十代、あるいは老人達の悩みを解決する能力を求めようとしても、それはもともと無理なことではないだろうか。

少なくとも、これらの人達を納得させるには、納得させるだけの説得力と、にじみ出た経験が必要になるだろう。

そうした能力というものは、やはりいろいろなことを学び、さまざまな苦楽の経験がそうした能力を引き出して行くものであろう。

魂のキャパシティ（容量）はこのように、さまざまな職業、仕事を通して、はじめて、その豊かさなり、広がり示して行くものであり、やがてその魂は宇宙大にひろがり、神の心に触れ合うように進んでいくものである。

人間の出発が神の意識から分かれ、そうして、神に帰って行くのは、人間に与えられた天命なのだ。目先の安住を求めて、そこに何時までもとどまることは許されない。

それは各人の魂が今世と訣別し、あの世に帰った時にはっきりと理解されよう。

勿論、ある次元にとどまる魂についてはそうした人間の天命を知ることがなく、地上界に執着し、魂の前進を遅らせる者も数多く存在するが、しかし、それでもやがてはそれを知り、再び、地上界に出生し修行し、悟って行くものである。

こうみえてくると、この地上界における職業仕事というものは、それ自体に目的があるというより、各人の魂の経験を積むためのよきパートナーであり、手段ということになるだろう。

職業に貴賤はないし、職業によって人格まで評価することはこれまた全く愚かなことといわねばならない。

前世は名もなき一介の市井人であっても、今世は歌手や俳優となって世界的に有名になった者もおれば、その反対の者もいる。

ペテロという人はイエスの弟子として有名である。

そのペテロは二千年前は貧しい一介の漁夫にしかすぎなかった。

イエスの意志をついだが、伝道には学問の貧しさから随分と苦勞したようである。

そこでペテロは、こんどは地上に出生した折りは学問をみっちり学び、事物の理解をふかめたいと学問の道にはいり、東大の総長までになった。

イエス伝を遺して他界した矢内原忠雄という人がかつてのペテロである。

こうした、例は非常に多いし、前生の仕事を今世でも為しつつある人もいるが、大抵はちがった職業に就き、その仕事を通して、人生体験を深めている。

私達の一日の仕事の量というものはほんのささいなものに過ぎないだろう。

その意味では五十年、七十年の短さを痛感する。

仕事や職業に、人生の全部を賭けようとするれば、大抵は悔いだけが残ることになるだろう。

しかし仕事を通して、人生に目的を見出し、人間としての価値を希求する者には満足と喜びが与えられるだろう。

価値ある行為というものは、より多くの人々に、どれ程の喜びと人生に生き甲斐を与えて来たかにかかっている。

仕事をより多くすることは社会にたいして大きな貢献をしたことになるが、神の眼から見た場合は、仕事の量よりもその質のほうがずっと重要視されるのである。

秀吉という男は、天下を平定したが、しかし、それは極めて表面的なことであって、彼の死後は再び戦乱が起こり、人心は再び動揺した。

社会を安定し、生活を豊かにすることは大事なことだが、それを裏づける心の安定がもっと大切なことを、歴史が教えている。

物質のみに走った栄耀栄華は砂上に建てた楼閣のように長くは続かないし、人心を真に安定させることは出来ない。

人心の安定と生活に喜びを与えるためには、神の心に適った物と心のバランスのとれた中道以外にはないのである。

中道の根底にあるものは心である。神の意識である。

その意識を根底にして、物と人心とのバランスが図られることが地上に住む者の在り方でなければならないのである。

それにはまず、なんと言っても人間の目的が調和にあり、仕事というものは各人の魂のキャパシティを広げていくものであるということを理解する必要があるだろう。

仕事の量より質が重要だということは、この地上界の人類の歴史が五官六根に左右され勝ちであり、五官六根の苦闘の歴史であったからである。

否、この事はこれからもまだ続いて行くであろう。目先の利に追われ、食うに困れば力づくでも奪い取るというのが地上界の意識である。

アラブの石油問題が米・ソの利害が一致し、戦争より話し合いが自国の利益になると、米・ソが判断すれば戦争にまでは発展しないのである。

すべてが物質的な利害によって動いている。

利害がこわれれば戦うしかないのが地上界を蔽っている人類の考え方だ。これでは物心両面の調和ある社会は成就できない。

そこで、物に走っている人々の心が、魂の転生を知り、永遠の生命体である己のいのちを理解するよう、神は作用、反作用という法を通して教えている。しかしそうした中であって、心に灯をかかげた人々にたいしては慈悲の光を与え続けているのである。

こうすることで、まず私達は、職業や仕事そのものに正業の意義があるというよりも、正業の第一の目的は、そうした仕事を通して己の魂をひらき、経験をより豊かにして行くことなのである。

正業の第一の目的は己の魂を豊かにするためにあった。

それは食うためではなく、生活を通して『空』の存在を認識し、正業の第二の目的である人々との相互の調和に役立つことであるわけである。

調和の意識一めざめは、『空』の真実を理解し、あるいは自覚することによって、より促進されてこよう。

調和とは何か、それは私達の地上での生活を真にエンジョイするものでなければなるまい。仏国土、ユートピアの社会は、調和された社会である。個の意識は全体の意識に結びついた社会でもある。

私達の自然的生活環境は、すべて神の慈悲によって、相互に生活が成り立つように仕組みられている。太陽の熱、光のエネルギーによる生物の成育、動、植、鉱の相互依存の関係というものは、神の慈悲によって生じた調和された関係なのだ。

もし私達の周囲に、植物が一つもなく、荒漠たる砂漠のみとしたら、私達の、つつがない生存は許されないであろう。植物は私達に食べ物を与え、酸素を供給し、色彩に変化を与えて、生活に喜びとゆとりをもたらしている。

鉱物の普遍的価値については論をまつまい。私達が立っている大地、水、その他必要な供給物資は、すべて天然の鉱物資源から供給されている。

自然的环境というものはこのように、私達の生活に必要なものを与えている。

しかし、一方において、私達人間も、植物、鉱物にたいして、彼等が成育できる環境や価値を生みだしている。

植物の生育には私達が吐き出す炭酸ガスが欠かせない。また私達の排せつ物は植物の肥料になっている。今日では、農耕肥料は化学化されて、私達の排せつ物は未利用資源として処理されているが、しかし、こうした状態が私達の人体に今後どのような影響を与えるか、やがて体質の変化や遺伝子としての問題を投げかけてくるのではあるまいか。

鉱物がそのまま大地に眠り、未利用のまま放置されているはその価値は半減されてしまう。人間や動物の生活に生かされるだろうか。利用されて、はじめて鉱物資源としての生命がよみがえってくるといえよう。

問題は、こうした資源が人間の恣意にもとづいて乱獲され、鉱物資源相互のバランス、循環の利用が無視されてくると、地盤沈下や海水汚染、空気の汚染にもつながり、人間の生活それ自体に大きな問題を与えてくる。このことについては後述する現代経済社会の中で述べてゆきたいと思うが、ともかく、私達人間と自然の環境というものは、こうした相互の作用によって調和されているのだ。

すなわち、たがいに補ない合い、助け合って、その生存を許し合っているのである。

正業の目的である私達人間相互の関係も、大自然が教えている調和ある生活が、正業の第二の目的でなければならない。

現代社会は、百年前、千年前のそれとは異なり、専門化され、分業化されて、単独では生きられないようになってきている。

もともと人間は集団の中で生活し、集団から外れて、勝手気儘に生きられるようには出来ていない。

このことは独り人間のみではなく、各種の動物も集団生活の中でその生存が許され、植物も鉱物もこの点は変わらない。

石炭や石油、金、銀、銅などの鉱物資源は決まってある一定の場所に塊まって眠っている。だからその資源を掘りつくしてしまうと、他の塊まった場所を探し求めなければならない。

集団生活は自然の摂理だからである。

人類創生のその出発も、旧約聖書にある通り、アダム（男）とエバ（女）の複数からはじまっている。

このように私達は複数の中で、集団で生活することによってのみ、子孫を残し、歴史がつづられるのである。

ロビンソンクルーソーのように、単独の生活を望んだり、あるいは風流人をよそおい、自己陶醉におちいるのも、またヒッピーに人生の生甲斐をもとめることも、何れも調和という自然の摂理からすると離れることになるし、これでは人類は死滅するほかはないのである。

ことに現代は、分業化が進み、誰も彼も自給自足の生活が望めなくなって来ている。これは人類の増加につれて、経済システムが合理化され、生活内容が向上されて来た結果にほかならない。

経済生活の原則であり、そして、よりゆとりある文化生活、精神生活を求めるために私達は最少の費用で最大の効果をあげる努力はこれからも続けられるであろうし、この原則は、いかなる社会にあっても変わることはないだろう。

こうみてくると、私達は自分の生存を保つためにも、仕事を通して、他を生かしながら生きて行かねばならない。

職業に就き、仕事をして行くことは人間として当然の義務であり、責任であろう。

さまざまな職業に就き、その道に励むことは、自分を生かし、他を生かすことにほかならない。

そうしてこうした行為そのものは、全体を生かす調和の基礎となるのである。

すなわち職業に就き、仕事を為して行く事は、自然の摂理である助け合い、補い合い、許し合う愛の行為につながる。

男女の和合を愛というのは、たがいに足りないものを補い合い、助け合うことを意味しているからであり、仕事を通しての愛の行為とは、その仕事に自分の能力を出し切り、他を生かすことなのである。

調和といい、愛という言葉は、極めて抽象的な概念として、これまでは掴み難いものとうけとられてきたようだが、大自然が示す摂理を紐解いて行くと、調和も愛もその真意は誰でも理解が出来、行為の上に表わして行くことができるものである。

イエスが愛を説いた。愛を説くには説くだけの理由があった。その重要な理由としてはイスラエルを中心とした中近東地区は当時も不毛の地であり、生活が苦しかった。その貧しい生活を互いに分け合い、生きて行くには、愛という助け合う心と行為が必要だった。人間として、心を豊かに、広い心をつちかって行くには、たがいにはげまし合い、許し合う心の触れ合いがどれほど大事であり、それがまた神の心につながり、自然の摂理に合致した生き方でもあった。

愛の行為は私達地上における光なのである。生きる道標なのだ。

仕事も愛の行為の表われでなくてはならない。

ところが現実はどうであろうか。私達の経済生活は欲望を中心として動いている。自分さえよければ他はどうでもという自己保存が愛の心を小さくさせ、エゴが人間社会を包んでいる。

労使の争いにしても、それぞれの立場で、どうして、こうも主張が変わってくるのかと思われるほどちがってくる。

ひと頃組合活動は政治的色彩がどんな小企業にも強く働いたようだ。最近ではこれが政府関係機関企業に集中されてきたようである。年々戦術も変わり、巧妙になってきているが、その目的が経済目的か政治目的かによって、争議の内容も大分ちがってこよう。

どちらに比重がかかろうとも、争いによる平和は望めないものだし、組合活動が労働者の生活向上が目的なら、まずもって使用者側の理解を求めることが必要だろう。労使の争いは、使用者側にも責任があるし、使用者のエゴに大きな原因があろう。

アメリカで自動車王となったフォードは、車の販路を広げるために、自社の労働者に思い切った高給を支払った。三カ月の給料で自社製の車一台を買えるようにしたのである。当時としては破天荒なやり方であった。ところが、これによってフォード社の需要はグングン伸び、またたく間にアメリカ市場の八割を占めてしまった。

フォードの経営理念はどこにあったかという、利潤をあげることより奉仕にあった。独占よ

り平等を求め、金持ちの独占物であった自動車を大衆に分け与えることを念願とした。

当時は、自動車は金持ちでなければ買えないし、乗ることも出来なかった。金持ちだけを相手にしても会社は十分経営出来た。しかしフォードはそれをしなかった。

フォードは晩年、自動車王となっても奢る心を持たず、自ら薪を割り、靴を磨いた。自分の身の回りことで自分で出来ることは人任せにすることをしなかった。

一九〇九年、わずか一万台の生産台数であったものが、一九一四年には二十五万台に達し、アメリカの自動車市場の過半を占めるに至った。

私達は単独では生きてはいけない。動物も鉱物も、集団の中で互いに助け合いながら、それぞれの持ち場を守り、その持ち場を十全にはたすことによってのみ、全体に寄与することが出来る。全体に寄与することは、とりも直さず、自分自身をも寄与してくるのである。

正法は私達に何を教えているか、それは生活の正しい循環であり、正しい循環は、一人一人が奉仕の心を持って、与えられた持ち場を守り、全体を生かすことにある。自分さえよければよい、生きているのは自分だけと思うようになると、私達の生活の歯車は自分を苦しめ、他をも苦しめることになる。

八正道の正業の第一の目的は自分の魂の輪を広げていくことであり、第二に全体の生活を豊かにすることであり、第三に、奉仕の精神につながることでなければならない。

既にこの論文の冒頭に述べたように、八正道の正業とは、①魂の修行 ②調和 ③奉仕の三点にしばられる。

これ以外に正業の在り方を求めようとすると、必ず欲望につながっていく。

欲望につながると、現代と同じように歪みが生じ、混乱が絶えないことになる。

既述したように、アダム・スミス以来の資本主義経済は、人間の欲望を基礎として動いているので、これでは行き着く先は飢餓しかないだろう。なぜ飢餓しかないかといえば、地球資源には限界があり、欲望のままに放っておけば、これらの資源は食い潰されてしまうからである。

さらに問題は人口の異常増加が挙げられ、これも放っておくと食糧と人口とのバランスを失い、戦争と人口絶滅という二度と再現できない地上の楽園を失うことになる。

したがって、経済問題は正業という人間本来の姿にかえて、共同社会の楽園に向って駒を進めてゆかなければならないことになろう。

5. 【正命】

心の発見(神理篇) P182

私たちの肉体は人生航路を渡る舟であり、この舟の支配者は意識、すなわち魂である。この魂は、神仏の子としての本性であり、私たちは神の体の中にいるのである。この現象界において、永い転生輪廻の中で造り出してきた業の想念は、私達の意識の中に記録されている。それを、神の子としての正しい想念によって調和することが修行なのである。

業想念とは、私達が常に心の中に想像している不調和な自己保存、自我我欲の姿であり、過去世においても持ち続けていたものである。それは、行為につながって行くもので、自身が反省することによって見いだすことのできる欠点である。また調和もできるものなのである。

人間は、眼耳鼻舌身意の六根によって惑わされる。過去世の悪い業の種も、そうした惑いから起きる。心は私達の肉体を支配している意識の中心で、自己には絶対に忠実であり、嘘をつくことはできない。ところが人間は、他人には都合が悪いと嘘をつく。そうした自己保存によって、より大きい業を造り上げてしまうのである。

私達は、眼で見た現象面のみで判断をくだしてはいけない。正しく見る心の修行、そうした構えで、的確な判断をし、中道の考えの中から出た調和の心によって結論を出すことが必要なのだ。

たとえ人の噂を耳にしても、自身でその原因と結論を判断するような生活が必要であり、肉体の五官のみで判断してはならない。肉体的な諸現象のみでは、正しい生活をすることはできないのである。

正しい神理に適う、各人の心の悟りが社会集団を構成し、その中から調和のとれた相互関係が

生まれてくるのである。正しい生活の中で、対人的な嘲笑や、恨み、妬み、そしり、怒りなどの思いは滅せられて行く。大自然の無限の慈悲に対しての報恩の心と行為が、平和な安らぎの光を、人類の上に現象化して行くのである。

神仏は、万象万物を、すでに人類修行の場として与えているのであるから、祈るよりは感謝の生活を具現することが大切なのである。己自身の魂が、実践行為による努力をしない限り、神理に適った修行はできない。すなわち修行は、一秒一秒の連続の中の正しい生活の中に存在していることを悟らなくてはならない。

神社仏閣に行って神仏に祈ることが信仰ではないのだ。祈りの心を持ち続けることが本当の信心であり、神仏の心を己の心として生活する中に初めてこの心の尊厳を悟り、心の眼が開かれ、観自在の力が発揮されるのである。

科学者が科学を通じ、芸術家が芸術を通じ、文学者が文学を通じ、スポーツマンがスポーツを通じて得た神理も、神に通じるものであり、そうした生活の中で人間らしく調和されてこそ本当の神理であることを悟らなくてはならない。

学問化した哲学的宗教は実践に乏しい。神理を悟らずに座禅をしても、煩悩を滅するために肉体行をしても、無意味であり、神理を悟って実行する中に本当の生活がある。

その神理は、自分自身の生活環境の中に存在しているのであり、その姿こそ本当の信心である。生活と結びつかない信仰は、すべて宗教としての存在価値はない。それは、正法を悟っていない人の行為といわねばならない。

すべて不幸の原因は己自身にあり、生活の不調和がもたらしたものであり、責任は他にはない。その原因を追求し、その根本をとり去る、心の反省の中から前進があるのである。

毎日の生活が調和された中には、常に神仏の光によって保護されるものがある。そしてそこには不幸は訪れてはこない。それは、正しい生活の実践の中に積み重ねられて行くものなのである。

人間釈迦① P114

「正しい生活」とは、人生の目的と意義を知った生活であろう。人間の生活は、大自然が調和されているように、調和にあるはずだ。助け合い、補い合い、笑いのある生活でなければなるまい。それにはまず己自身の調和をつくってゆく。自分の長所をのばし、短所を修正してゆくものだ。自分が円満になれば周囲もまるくなるはずである。自己をみつめる厳しい態度をはずして、正しい生活はあり得ないものだ。

心の原点 P120

正しく生活をするとは、日常生活の心と行ないについて、家庭生活の在り方、近隣の人とのつき合い、勤め人としての在り方、使用者としての在り方などを、正しくするということである。

私達は、この日常生活においては、とかくささいなことに心を煩わし、六根に左右されがちであり、心の歪みを造ってしまうものだ。

ことに、眼で見る諸現象、耳で聞く諸問題、そして、語られる言葉、そんなものによって私達は心を惑わす場合が多いものだ。

また、他人をも惑わして、大きな罪を造ってしまう。このように、眼、耳、口は、もっとも代表的なもので、これらに振り回されてしまうと、煩悩のとりこになり、自分自身を失ってしまうのだ。

そして、転生輪廻の過程で造ってしまったカルマ（業）が心のなかにしみ出してきて、悪循環（悪い運命）に身を墮とすことになってしまう。

望まないのに、病気をしたり、交通事故に逢ったり、人に騙されたりして、人を信じることもできなくなり、小さな心になる。小さな枠に入った自分を造り出して、苦しみの人生を送ることになってしまうものだ。

そこで、こうしたカルマに振り回されないようにするため、まず現在の環境、立場、生きていられるそのこと自体に感謝することが大事だといえよう。

物一つ求めるにも、多くの人々の苦勞によって造られ、助けられ、また太陽や水など、自然の

恩恵があって、私達の存在はあるのだ。

私達は、これにむくいることが大事なのである。

それには、自らの欠点を知り、修正し、社会人類のために余った時間を奉仕することが必要なのだ。

「正しく生きる」には、まず六根に左右されない自分を発見すること、それが先決であろう。

それには、自分の短所、長所をしっかりとみつめ、短所を修正し、長所を伸ばすことが大事であり、そのための勇気と決断が必要である。

病気にしても事故にしても、また人に騙されたりすることは、五官に振り回された想念と行為に問題があるのだ。

私達の欠点短所は、どうしても五官にもとづいた想念に一番結びつきやすい。だから、欠点の修正には、思い切った勇気が必要だといえよう。

正しく生活をするということは、人生の目的と使命を悟った毎日の生活行為にあるわけで、常に、安らぎの境地にあって、一切のこだわりや執着から離れ、足ることを知った生活を送るということだ。

執着から離れ、足ることを知ってしまうと、仕事などできないのではないかと思う人もあるだろう。しかしそれは、愚問というものだ。

正道を悟って、悔いのない仕事を一日一日積み重ねたならば、誰でも彼岸に到達できるのである。

一日一生、思い残すことのない生活を送ってみることだ。

そして、反省しても、良い面だけしか出てこないような、そんな一日を体験してみることだ。

心の指針 P107

正命とは文字通り、正しく生活することです。正しい生活を送るには、まず自身の業（カルマ）の修正、短所を改めることです。

人間は誰しも、長所と短所の両面を持っています。長所と短所というものは、光と影のようなもので、性格が片寄ったときに、長所が短所になり、短所が長所に変化します。

信長は非常に気短かな男だったようです。しかしその短気が決断となって現れたときは、神出奇没の戦術に変化し、戦国の世を生き抜く絶大なエネルギーになったようです。

このたとえばあまり感心しませんが、長所と短所というものは紙一重であり、それは紙の表と裏のようなものといえるでしょう。

そうした紙一重の性格をどうすれば長所に変えることが出来るか、あるいは長所とは何か、短所とはどういうものか、となりますと、短所は自分の心をさわがし、人の心をも傷つけるものであり、長所は、自他ともに調和をもたらす性格といえるでしょう。

長所を伸ばし、欠点を修正することによって、自身の想念と行為はもとより、自分の周囲を明るく導くことができるでしょう。

私たちのこの世の目的は、この地上に仏国土・ユートピアをつくることです。それには正しい生活を営まねばなりません。正しい生活は、まず自分自身の調和からはじめねばなりません。自身が調和を保たなければ、自分の周囲も調和に導くことは出来ません。

欠点を修正するにはどうするか。それには第三者の立場から、自分の心を、毎日の思うこと考えること、行為を、反省することです。

心行の言霊 P241

正しい生活は、右にも左にも片寄らない中道にあります。

中道とは仏教でいう色心不二です。

色心不二の生活は、調和ある精神的、肉体的生活を意味する。人間の生活は、そのどちらに片寄っても不調和になってしまいます。

たとえば、煩悩を滅却したいとして肉体行に打ち込み、滝に打たれ、断食をし、己の肉体をないがしろにすると、やがて健康を損い、自分の心をも見失ってゆきます。自分を失うとは魔に犯

され、普通の生活ができなくなることです。

肉体行は、精神のみにウエイトを置き、肉体を無視するところにあります。しかし、その精神についても正しい精神の在り方である、正法を規準としたものではないので、それ自体にも問題があることはもちろんです。

また、精神を無視し肉体中心の生活に比重が傾いてきますと、今日のような混乱した社会ができ、家庭も、人とのつながりも瓦解してゆきます。

では正しい生活とはどうすればよいものか、それは正道の目的である中道を物差しとして、己の業を修正し、中道に適った生活をするということです。

業は私たちの性格、性質の上に、その人の短所という形で現われています。

人の短所は自分自身にも他人に対しても、よい結果を及ぼしません。

怒り、愚痴、優柔不断、独善、気取り、強欲、中傷、そねみ、粗野、多弁、排他、増上慢、引っ込み思案、自閉、出しゃばり、憎しみ、怠惰・・・

こうした性格は自分自身を孤立させ、自分の運命を不幸に行きます。

正しい生活は、まず自分の短所を長所に変えてゆくことから始まります。

長所とは、明るく朗らかで、素直であり、人と協力し、助け合い、補い合ってゆく調和の生活です。

人間は、みなこうした心を持ち、そうした性格を持っているのですが、環境、教育、思想、習慣などの影響をうけてさまざまな業を作り出してしまっています。

業が身につくと、業自体が回転を始めるため、怒りの場面にぶつかると、習慣的についカッと、なってしまいます。

つまり業というものも常に輪廻します。「わかっちゃいるけどやめられない」というのが業なのです。

人の欠点の三分の二は今世のもの、残り三分の一は過去世の業といってもいいでしょう。

したがって三分の一の業は、反省してもなかなかその原因をつかまえることがむずかしいものです。しかし、今世の三分の二の業が、これの影響をうけて働いていますので、その三分の二の業を修正することによって、修正することが可能です。

己の欠点を正すことは、己の安心につながることであり、己の心が安心し明るくなれば、自分の周囲も明るくなります。

正しい生活は、こうして、まず自分自身が修正して、初めて可能なのですが、それには八正道の規範である「正定」による正しい反省が重要になってきます。

中道に反する生活は、すべて自己保存という想念行為が原因であり、自分中心のエゴ、原罪にあるわけです。

原罪とは肉体五官による六根、迷い、煩惱にあるわけですから、まず六根を清浄にする反省の生活が、自分の業を修正することになります。

このように、正命の目的は、精神的、肉体的な調和をめざし、業と化した様々な原罪(自己保存の想念)を正すことにあるわけです。

6. 【正進】

心の発見(神理篇) P185

私達の人生は、肉体を持って八十年か九十年であり、肉体の舟に乗ってしまうと表面意識が一〇%、潜在意識が九〇%という比率で、ほとんど目先のことしか分からないために、自分自身が悟る修行の場としては非常に良い環境である。

この現象界は、人の心の中が分からないため互いに誤りを犯すのであり、一寸先は闇というようなことをいうのである。しかし、人間生活はだから有意義といえる。心の精進を日夜にし、より高い次元の世界に魂を磨いて行くことができるのである。

また逆に、先のが分からぬから、苦悩の原因を自ら作り出し、悪いことも堂々とするようになる。人生は暗闇だ、などという考えになってしまう。人生は、正しい生活をしていれば、決

して暗闇ではない。

人々の心を重んじ、我欲にもとづいた考えを正して、自身の言動を、第三者のつもりで注意深く見守りながら生活することが、正しい生活というのである。こうした生活の中から、私たちの潜在意識に包まれている無限大の智恵が解き明かされ、人間として生活をしている喜びを悟ることができるのである。

実在界、あの世から見ると、私達現象界における生活状態や心の在り方は、丁度四方透明のガラスの中でのように見える。心の嘘も分かってしまう。

私達はその次元の異なる世界の存在を、否定することはできないのである。自分の生活がこのようにガラス張りを知ったら、人間は苦しみなどは造れないことを悟るであろう。

自分だけの心にしまっている不調和な生活を精算し、真実己の心に忠実な、正しい生活に励むよう実践することである。正進、この言葉の意味はここにある。

人間釈迦① P114

「道に精進」とは、親子、兄弟、友人、隣人における人間としての在り方であろう。人間は大自然と人との関係を通して、はじめて自分自身の大きな自覚に到達できるものである。大自然もない、自分以外の人間も存在しないなどと考えるのは愚かなことだ。同時に、自分以外のあらゆる存在は、自己を認識するための材料であり、魂の向上に不可欠なものであろう。

親子、友人、隣人の関係を通じて、自己の魂を正しく磨いてゆける現象界は、天が人間に与えてくれた慈悲でなければならない。

道への精進は、人間の特権であり、神の慈悲である。動物にはみられぬ偉大な要素を持った者が人間であるからだ。

心の原点 P123

「正しく道に精進する」とは、主として人と人との関係においての言葉である。夫婦、親子、兄弟、友人などは、それぞれの因縁、あるいは約束のもとに、結ばれているのである。だから我欲にもとづいた自己主張をしないで、調和ということを目指し、感謝と報恩の毎日の生活を送ることだ。

なかには、自分は調和をはかりたいのだが、妻が、夫が、友人がなかなかいうことを聞かないという人もあり、別れたほうが良いと思う人もあるだろう。

しかし、本来は、片方がゆるむ心を持って態度を変えれば、相手も変わってくるものだ。意志疎通がないというのも、何か原因があるからで、不調和な根を探し出して、良く反省することが大事だろう。

しかし、それでも調和できない人々もあるだろう。相手の暴力や毒舌が、休まず攻撃してくることもあるだろう。

だが私達は、中道から逸脱した相手の姿を感じたなら、争ってはならない。争わずに、「この哀れな者に、どうぞ神よ、安らぎをお与え下さい」と心から願うだけの余裕が欲しいものである。

忍辱とは「あとで見ている」「あとで仕返しをしてやる」というようなことを、心のなかで思うようでは、忍辱とはいいがたいし・・・その想念は暗い曇りでおおわれ、自らの靈困気を不調和に乱してしまうことになる。外部からの辱しめによく耐えて心に歪みを造らないことだ。結論は、調和できない人々は、肉体的に不調和になったり、他人の信頼も失って、ますます苦しみの渦のなかに埋没してしまうということである。

原因と結果はめぐってくる、ということを知らなくてはならない。

物理学で説かれている作用と反作用の法則と、全く同じ結果になっているということだ。

自分自身の心を、丸く広い豊かなものに造り、不調和な環境にもいろいろなケースがあっても、大調和を目的とした人間関係を造り上げてゆくことが、精進の第一の目的といえよう。

心の指針 P109

私たちの人生は、いくら長生きしても八十年か九十年、その短い一生を目先の利益のために過

してしまうことは惜しいかぎりです。意識の一〇%しか働かないとすればそれも仕方ないかもしれませんが、しかしそうした環境だからこそ修行が出来るといえます。何もかもわかったならば、この世に生まれた意義はありません。

正進の目的は、対人関係と地上の環境を整備し、調和させることです。

人は単独では生きられないし、また生まれてもきません。必ず両親がおり、そして兄弟姉妹、夫婦、隣人、友人、先輩、後輩というように、そうした環境の中で生活しています。

そして、そうした関係の中で、己自身の心が練磨され、尊重し合う心がつくられてゆくのです。

最近のように物質オンリーの風潮が強くなりますと、親子でも心は他人であり、夫婦は享楽の手段としか考えぬ人も出てきます。友人は利益追求の手段であり、自分以外はすべて他人というようになってきます。恐ろしいかぎりです。

親子といえども魂はちがいますが、しかし、自分を生み、育て、今この世に在るということは、両親の賜です。もし、その両親があのお世（出生する前に親子の約束を交わす）の約束を果たさず、放蕩したり、あるいは胎児をおろしたりするようなことがあれば、話は別ですが、そうでなければ、この世に生まれ、魂の修行の機会を与えてくれた両親を安心させるような自分自身に成長することが、人の道に適った生き方でしょう。

夫婦にしても、大抵は前世で夫婦であるという場合が多く、そうだとすれば互いに助け合う、愛の環境をつくるのが大事なのです。

兄弟姉妹、友人、隣人にしても、それぞれが助け合い、補い合い、話し合える愛の行為が出来るよう励むことが、人の道です。

正進の目的は、人の道、神の道を具現してゆくことです。

第二の目的は、私たちの共同生活が末長く続けられるように、動物、植物、鉱物資源を整備し活用してゆくことです。

私たちの生活は、こうした動・植・鉱物の資源を活用しなければ生きてゆけません。

そのため、こうした資源が循環の法則にそうように、大切に保存しながら、そして、それらを生活の上に活用してゆくことです。

神は私たちが平穩に生活できるよう、大地と、資源と、生きる環境とを与えてくれました。これを、半永久的に保存し、活用してゆくためには、私たちは、資源の再生産が常に可能になるよう、それらを大切に扱ってゆかねばなりません。

つい最近まで、鳥や獣を見ると勝手放題に殺してしまっていました。必要なものなら許されますが、面白半分に動物を殺傷することは、植物資源の枯渇にも影響してきます。

石油や石炭も今日のように使い放題、掘り放題にしてゆきますと、これに代わる動力資源が出来る前に、ガスや電気はとまり、再び原始時代がやってくるでしょう。

こうした自然の資源は大切に活用し、科学の進歩と歩調を合わせて使ってゆかなければいけないものです。

資源を大切にする、ものを大切にすることも、道に適った生き方なのです。

私たちは常に反省し、行き過ぎや怠惰にならないよう、自戒してゆかなければなりません。

天使の再来 P046

正進(正しく道に精進すること)

これは、努力と実行であります。

いかにうまいことをいっても、実行しなければ意味がありません。パスカルは、人間を称して、考える葦といていましたが、それ以上に大事なことは実行であります。考え、そして努力すること。神仏の心は、正しく考え(思い)正しく実行することを望んでおります。

人間の魂や肉体というものは、この努力と、実行によって、その修行の目的が達せられ、同時に各人の内に眠っている潜在意識が開発されてくるのであります。

ここでいう潜在意識とは、心理学上の潜在意識よりも、もっと深く、その人の前世、過去世あるいはあのお世での生活の記録をいいます。従って、各人の努力と実行、つまり、心の調和度によって、千年前、二千年前、一萬年前、二萬年前の自分の過去世が分り、かつて学んだ様々な記憶

がよみがえって現実の生活に大いに役立つことになります。

しかも、各人の潜在意識は、神仏の心にも通じていますから、かつて学んだそのこと以上に、無限の宝庫に包まれており、この世にあるありとあらゆるものは、あの世にもあるわけですから、各人の努力の結果いかんでは、その求めるものに応じて、与えられましょう。やがて、無限大に広がった心は、慈悲と愛そのものとなり、そうして宇宙即我の自覚、神の智慧が得られることになりましょう。

このように、努力は向上への大切なステップであり、そうしていかなる諸問題にたいしても、自分に打ち克努力をつづけて欲しいものです。

心行の言霊 P247

私たち人間の道は、中道に沿った調和の生活にあります。

いふなれば、正しい普遍的な法にあるわけです。

法とは、循環の法則であり、循環の法はこの地上界のあらゆる面に適用されています。

正道の生活とは、この意味で循環の法に乗った生活であり、正しい生活です。正しい生活とは前述の通り、中道の生活であり、中道の生活は、人びとをして調和の生活に導いてゆくものです。

中道の生活は、慈悲と愛の生活であり、その想念行為は再び自分にめぐってくるものです。

自己保存の片寄った独りよがりの生活は、この地上界が相互扶助の調和を軸に動いているので、当然その反作用として、苦しみを招きます。

循環の法が働いているからです。

正進の目的は、人間関係の調和にあります。

正命の目的が自分を正すものでありますから、その次にくるものは、人びととの調和なのです。

人間関係とは、夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、そうして個人と社会の関係であり、それは、まず自分の足元から始まって、全体にまで発展してゆく調和のリズムであり、波動であります。

夫婦の関係は、たがいに足りないものを補い合い、よき子孫を育て上げてゆくものであり、親子の関係は、過去世の縁によって生じたものなので、親は子をいつくしみ、子は親を敬うのは当然なことです。

兄弟は、たがいに向上し合う切磋琢磨する間柄であり、友人は、社会生活のよき協力者といえましょう。

こうした人間関係の調和に一貫して貫く柱は何かというと、それは他を生かし、助け合う「愛」の心です。

愛こそ、調和の姿であり、この世の光なのです。

この地上は、男女の両性から成り立っています。一方が増えても困るし、減っても困る。男だけでも女だけでも人間社会は成り立ちません。

考えてみて下さい。もし、一方だけが存在し、一方が存在しないとすれば、人間社会は、百年を待たずに絶滅してしまいます。これでは、この地上界に、仏国土もユートピアもできません。

男女の両性があるのはじめて、社会生活(それはまず家庭から)が生まれ、子孫を育てることができます。人類の永遠の生活は、こうした男女の両性の存在によって可能であり、調和ある仏国土も完成されてくるのです。

男女の両性にはそれぞれ特性と役割があり、それぞれが助け合うことによって調和されます。色心不二の中道の精神はここでも生きています。

現象界は、天地に分かれてはじめて空間が生まれ立体となり、生命の生きる場がつくられます。

地球は南極、北極に分かれ、地球の自転、公転を正しく回転させ、地上の生命を育てています。

人間の世界も男女の両性がある、人間社会が永遠に続いて行きます。

調和、中道、愛、慈悲という言葉の意味を現実的に、実際的によく考えて下さい。

そして、こうした言葉が現実的に生きてくるのは、常に複数という関係の中においてです。これらの言葉は単独では決して成り立っていないことを考えてみて下さい。

正しく道に精進するとは、私たちが複数という社会の中で、他を生かし、助け合ってはじめてその意義が生まれ、本来の目的に適ってくるわけなのです。

7. 【正念】

心の発見(神理篇) P186

現代宗教の多くはただ祈ることのみが、念ずることだと思っている傾向がある。

経文というものは、拝むための道具ではない。経文の中に書いてある意味に、私達の眼は向けられなければならない。

特に仏教は、むずかしい哲学化した経文を上げることが、一つの勤行と化している。

これは大きな間違いである。その中の意味にこそ意味のあることをなぜ悟らぬのであろうか。

ありがたいお経だと思ったなら、その経文の文言の意味を実践するところに、意義のあることを悟らなくてはならない。

亡くなった人々に、お経を上げることによって功德があると信じていることは大きな間違いなのである。なぜなら、もしこの世を去った人々の霊がその経文の意味すら分からないのになぜ功德があるか、ということを考えてみることである。

ただの観念論ではすまないことを知らなくてはならない。読者は自分の分からない言葉で相手から語られて、その理解が行きとどくであろうか。

人間は、現世での生活状態、心で思っている状態を持ち続けながらこの世を去って行くものであって、死んでしまったら即座に仏になるのだというならば、そのことを説く人々が実際に分かってそのような説明をしているのだろうか、疑問を持たずにはいられない。物理学でいう慣性の法則を考えてみることである。あの世にも慣性の法則があるのだ。ここでいうそれは、現代の意識を持ったまま、次元の異なった世界に循環して行く死者は悟るには時間がかかるということである。

読者の中にはそんなことが分かるはずはないと反論する人々があるかも知れない。しかし私達は、即座にその事実の状態を現象化することができるのである。

これは事実であり、そのままの姿とその当時の言葉使いで、その人の特徴で、その関連の霊と語る状況を、疑問のある人には証明することができるのである。

それは、その人の生活をしてきた念を、そのまま持っている事実であり、人間として正しい生活をした己自身を知っている霊以外は、地獄にいることを私達ははっきりと見ることもまた語ることも可能だからである。

それだけに私達は、正しい心の在り方を悟り、神仏に祈ることもただ自己保存の祈りではなく、感謝の念を持ちその心で実践する中に、より以上の力を神仏から得られるのである。

私達は心の中で念ずることが即現象化されるのであり、たとえば自分が欲望を果たそうと念ずる心はすでに欲望のとりことなる、という想念になり、自分の意識に記録されてしまう、というふうなことである。その記録を修正することはできない。

私達が歩んできた過去を消すことができないように、私達の想念は、すべて記録し保存されることを忘れてはならない。しかし不調和な念も、反省することによって、私達の心は進化するのであるから、反省のない人は哀れである。反省は、神仏が人類に対するために与えた慈悲なのである。

また、神社仏閣に参詣することはその人の自由であるが、神仏はその人に対する幸、不幸の責任は持たないということを知らなくてはならない。正しい心の念と行為が、幸、不幸を造り出すのである。

正しい念によりその行為が神理に適っているならば、私達に協力してくださる指導霊や守護霊達は必ず神の光を与えてくれる。またこの地球そのものも神体の一部であり、大神殿であるから、正しい念は必ず通ずる。

神社仏閣は、将来人々の心の修行所、神理を学ぶ場所と変わり、また多くの人々の娯楽の場と変わって行くであろう。

現代の神社仏閣の中には、霊域の高い場所もあって、実在界の諸天善神が常に連絡所として一念が現象化される場合もあるが、そのような神域ははなはだ少ない。従って神社仏閣はどこでも

霊域が高い所だ、と信ずることは危険であり、かえって不幸を呼びこむこともあり得ることを悟らなくてはならない。

正しい念を持っている人々は、必ず神仏の光によって保護され、他のよからぬ不調和な霊に支配されることはない。

多くの人々が今まで、神とか仏とかいっているのは、実在界の天使達のことなのである。然し、天使も心の調和度によって段階があるということも悟らなくてはならない。また、天使達のほかに不調和な世界があるということも知らなくてはならない。

私たちの想像は無限大である。しかしその想像も正しい調和のための想像でないと、正念とはいえない。間違った念によって己を失う場合があることを知るべきである。

その証拠には、不自然な新興宗教や不調和な仕事に専念している人々に、果たして心の安らぎがあるであろうか。自己の心の中に小さな枠をはめて常に格闘を続けているため、不幸になっている人は少なくないのである。

人間は生き神さまになどなれるものではない。

神仏の心と調和することは、自分自身の正しい念と、行為以外にはないのである。

神は己の心にあり、と知らねばならない。

人間釈迦① P115

念は願いである。念のない人生、念のない生活はあり得ない。人は今日より明日を思うから生き甲斐が生れるのであり、明日のない人生は死を意味しよう。今日に生きる者は強者だが、人間は、死の瞬間まで希望を託して生活していくものだ。その希望が自己本位に傾くと人との調和が崩れ、自分自身も立ってはいられない。

念のあり方も調和という中道に適ったものでなければならぬし、「正しき念」は無制限に発展する欲望をコントロールし、足ることを知った、人生の目的を自覚した願いでなくてはなるまい。

ここで念と祈りについて考えてみよう。

念も祈りも、ともにエネルギーの働きから生れる。

ものを考える、思うことができるのは、人間の五体の中に、そうした創造能力を生み出すエネルギーの働きがあるから可能なのである。睡眠中は、こうした能力は働かない。これは、エネルギーの休息であり、同時に、エネルギーの補給のために、人間は、睡眠中に、次元の異なる世界に旅立つからである。

魂というと、否定する者もあろう。しかし、魂のない人間は一人もいないのだ。魂とは個性を持った意識をいうのである。睡眠は、魂と肉体との分離であり、このために、グッスリ眠ると鼻をつままれても、地震が起きても、わからないのである。目がさめるとは、魂が肉体に入ることである。考える、思うことは、肉体がするのではなく、魂を形成しているエネルギーの働きがあるから、可能になってくるのである。

念も祈りも、個性を持った魂の働きによって行なわれる。念は、人間の目的意識を現わした働きである。誰々と結婚したい、出世したい、事業をひろげたい、老後の生活を安定させたい、子供が素直に育って欲しい、というように。

人間である以上、こうした目的意識を持たぬ者は一人もいない。目的意識があるから、文明や文化が育ち、社会生活がエンジョイされてくる。

ところが人間は、肉体を持つと、肉体にまつわる想念に支配されてくる。自己本位になってくる。これは俺のものだ、人に構っていると生きてゆけないというように。争いのモトは、こうした自己本位の想念、つまり、そうした目的意識を持った念の働きが作用するために起こってくる。

そこで人間の目的は、調和にあるのだし、調和とは、助け合い、喜びをわかち合うことなのであるから、人間の目的意識も、ここに焦点を合わす必要があるのである。正念は、こうした調和という尺度を通してなされるものであるし、正念の次元は、それゆえ、非常に高いものになってくる。

仕事について考えると、仕事そのものは、社会に、従業員に、家庭にたいして、その生活を保障し、うるおいをもたらすものだ。仕事に忠実であることは、正念のあり方に適ってくる。この

ことは、主義や、主張や、社会制度に関係がない。社会主義であろうと、資本主義であろうと、仕事に忠実に打ちこんでいく態度は、そうした制度とは本来無関係であるからである。問題は、それによって生み出された利益、収入をどのように使っていくかによって、それぞれの念の在り方がどのようなものであったか、ちがってくる。つまり欲望を満たす自己本位のためだったか、それとも、その利益を家庭に、従業員に、社会に還元するためだったか。

足ることを知った念の在り方は、人間は自己本位に流れやすいので、正念を生かす一つの尺度として、必要なことなのである。

正念の在り方、生かし方は、こうした足ることを知った考え方を踏み台にして、昇華してゆくものである。

つぎに祈りについて考えてみると、祈りは感謝の心を表わし、その心で生活行為をしていく思念である。

人間は、一寸先闇の中で生活している。明日がわからない。いつ災難がふりかかり、あるいは喜びごとがあるかも知れない。隣の人が今、どのように生活しているかも知れない。

そうした中で、健康で、楽しく、明るく生活できることにたいして感謝する気持ちが湧き上がって来たときに、私たちは祈らずにはいられない気持ちになるものだ。しかし通常は、願いごとに終わっている。神社仏閣にいて、こうして欲しい、ああして欲しいと手を合わせる。

正しき生活行為、つまり調和に向って努めているときには、その願いごと、祈りはたいてい叶えられる。正しき「祈り」は、次元のちがったあの世の天使の心を動かし、その願いを叶えてくれるからだ。この意味から「祈り」は天使との対話であるといえる。奇蹟は、こうした「祈り」によって起こるものである。

人間生活にとって、「祈り」のない生活は考えられないし、独裁者が自分以外の人間のこうした思念を押さえようとしても押さえることはできない。

ただこれまでの「祈り」は、我欲のそれに使われ、祈っておればタナポタ式に、なんでも叶えられると思われている。念仏を唱えればうまいことがある。祈っておれば救われるという風に考えられてきた。そんなものではないのである。

こうみてくると念は、目的意識であり、創造活動の源泉であり、祈りは、生かされている感謝と報恩の心、進んでは神との対話であるわけである。そうしてそのどちらも、エネルギーという力の波動によって為されていることが明らかになったと思う。

人間釈迦③ P261

心の中で念ずることは、善悪いずれにも通ずるものであり、衆生の幸福を念ずることは、衆生の心に、安らぎを与えるものです。正しく念ずることが大事だといえましょう。他力ではなく、自力なる慈愛の心で念ずることは、光明となって、人民の心に安らぎとなり、現われてくるでしょう。

正しく念じたならば、実践することが、指導者として大事なことだといえましょう。

心の原点 P124

“念”には目的があろう。偉くなりたいたいとか、良い家に住みたいとか、あの人と結婚したいとか、あの人は憎らしいといったことなど、人によってさまざまであろう。

しかし、念の正しい在り方は、中道にかなった目的が、最上といえよう。

念のなかには、自分の欲望をもととしたものが多いが、この欲望はとどまることなく、発展して行くものである。これが、やがて、人と人との調和を欠くことになるのだ。

人間には、転生輪廻の過程において造り出してきた自らの器量、この現象界に出てからの器量とある。それが総合された人間の器は、人それぞれ異なっている。

一国の大統領になろうとしても、大統領は一人しかいない。ところが、器量に関係なく、ポストを求めるから、争いとなる。

昔は、武力でこれを奪い取ったが、現代はどうだろうか。

選挙というものもあるが、これにも闘争はつきもののようである。そして役人や、会社員の世

界にも、役職に対する執着、ポスト争いには熾烈なものがあるという。

こうした、自己の欲望にもとづいた念の作用が働くため、社会は争いと矛盾に満ちたものになってしまうのである。

このような欲望も、それぞれが、自分の器がわからないため、自我我欲のとりこになってしまうところに発生するものといえよう。

またこれは、自分の適業が、何であるかという判断が、むずかしいからともいえよう。

しかし、欲望には、これでよいという限界がない。そのため、人間は、自らの心に足ることを知った生活、それが必要であるということだ。

念の在り方は、こうした意味で、足ることを知った、調和にもとづいたものであることだ。

心の指針 P112

念とは、思い願う、エネルギーのことです。

あれが欲しい、これが得たい。あの人と結婚したい、こういう仕事をしたい……、というように。

つまり、念には常に目的意識が内在されています。

目的のない人生は、漂流した船が大洋にさまよっているようなものです。

思うこと、願うことは誰しも抱くものであり、そしてそれは自由ですが、足もとをみつめた目的をもつことが大切です。

正念の在り方は、調和にあります。就職、結婚、育児、仕事、諸事全般にわたって、常に己を知り、その目的が、神の心である調和、愛の行為に適ったものであるかどうかを、正しく見ることです。

適ったものであれば、それに向かって努力することです。

念を抱くと、たいていの場合、それに応じたものが返ってきます。

念は、物を引き寄せるエネルギーを持っているからです。

しかし、不相応な願いや、しつとや、憎しみ、足ることを知らぬ欲望を抱くと、目的が適う前に反動がやって来ます。

念はエネルギーであり、そのエネルギーは、必ず自分自身に返ってくるので、正しい目的ならばいいが、そうでないと大変なことになります。

念は魔術師です。

科学が未発達の前時代には、祈りや念によって、敵を倒すということが行われました。事実、そうしたことが流行したものです。

念の力で大石を空中に持ち上げ、大木をたおす。風を呼び、雨を降らせるといったような術が行なわれていたようですが、こうしたことは本来、邪道です。しかし、人間の中にたくわえられたエネルギーは、大きな山を動かすことも可能ですし、それは神が大宇宙を創造されたように、人間もまたそうしたことが出来るように仕組みられています。

それほど人間は偉大なのですが、反面、邪の道に念力を使うと地獄に堕ちるしかありません。私たちは常に、念を正しく使うことが大切であり、そうしたときに、守護・指導霊が力を貸し、より偉大な、平和な仕事が成就できるようになるのです。

心の指針 P119

問：他力信仰の指導者がある本で次のように述べていました。「・・・念力とは、想い、つまり想念や思念の力であって神とは直接関係のない力なのであり、祈りとは生命（神）を宣り出す方法、つまり、自己の生命の働きを、神の生命として宣言し、真直ぐに発願することなのです」と。

また、祈りはきかれますか、念力と祈りの違いを教えてください。

答：念力も祈りもともに想念の働きです。想念はエネルギーという電磁的波動に乗って生まれるものです。思う、考える力は、神から与えられたエネルギーであるからです。

さて念力は一口に言って我欲の想念であり、祈りは神の生命の宣言だとしていますが人間の本当の姿を知ると、言葉の持つ意味にとられることの無意味さを悟ります。

大宇宙は神が創造したものです。光あれとって光をつくり、海をつくり、草木をつくり、人間をつくりました。これは神の一念によるものです。

人間は神の子です。その証拠に、自分にウソはつけません。またこの地上にユートピアを創造してゆく力を与えられています。文明文化は人間の一念の産物です。

問題は、その一念に、人間は、我欲を上乗せして生活している、という実態です。だから、念力は我欲のそれだという風にみられてきたわけです。しかし、念力のエネルギーは、神の子の創造力を意味し、したがって本来は、その念力を「正念」として使わなければならないものです。だから、八正道の一つに「正念」が入っているわけです。

ところで、人間はこの地上に生まれると一〇パーセントの表面意識で生活するため、一寸先さえわかりません。このため、神の子の自覚を求める姿勢、神への郷愁、神への感謝が、祈りという形式をとってきたのです。

本当の祈りは「真心」の発露であり、「反省」であり、そうして、それにもとづく行為であり、神との対話を意味します。真心のない祈りは、神に通じません。反省と行為のない祈りも、神はきいてくれません。祈りが高まると守護・指導霊との対話が可能になります。アラハン（阿羅漢）の境地にまで心が高まると、こうしたことが実際に出来るようになるのです。これまでの考えは、祈れば救われる、拝めば何でもかなえられるといわれてきましたが、そんなことはないのです。

まず、人間は、神の子であり、したがって、正念を持って、その調和をはかり、環境を調和してゆくものです。またそうすると、神は、祈らなくても、その人を守ってくれます。本来そういうものです。

念力は我欲、祈りは神の生命の宣言と、観念的に片づけられては困ります。また、想念の意味についても、言葉のアヤで解釈されては誤解を招きます。この点を、しっかり心に入れておいて下さい。

天使の再来 P047

我が国は法治国家であります。様々な法律をきめて、人々の行為をしばっています。なぜ人々の行為をしばらなければならないかといえ、最大多数の最大幸福をその理念におき、その理念に反した者を取締まらなければ国の維持、運営がスムーズにゆかないからであります。もっとも、法律の内容そのものは、その国の歴史、風俗、習慣、民族性などによって、いろいろ異なって参りますが、ともかく法律行為というのは、現実的に、たとえば盗みなら盗みを働いた時でなければこれを罰しません。各人がいろいろ想像する分には、一向に差支えないのであります。

ところが、ここでいう正念というのは、そうした法律行為以前の想念、想像が重大視されます。といいますのは、行為というものには、必ず、その前に想念の働きがあります。箸一つ動かすにも機械室である頭の働きがなければ動きません。よく偶然とか、ハズミとかいって、その責任を回避される場合がありますが、こうした場合にも霊的には憑依現象という形をとり、その憑依現象も、類は類をもって集まるという法則のワク外には、決していつだつはしないのです。

神の国、仏の国は、それ故に地上の様々な法律の規制以前の各人の想念、意識が問題にされません。

聖書マタイ伝の一節に「すべて色情を懐きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり」というのがありますが、これは人間の想念は、やがて行為を伴わずにはおかないし、又一口に想念行為ともいわれるように、それは又、行為そのものとみられるからであります。

更に、もっと重要なことは、こうした黒い想念はその度合いが深くなりますと、やがてその人の意識にまで食くいこみ、その人の今世での天命を損ない、病気、早死などの諸原因をつくる元をつくります。

これでは神の国、仏の国は、いよいよ遠のくばかりです。

人間は本来、神の子、仏の子であります。最大多数の最大幸福という理念やこの目的を果たすために法律であれこれしばらなくても、その心、その理想像は等しく各人に内在するものであり

ます。しかるにその神性仏性から離れるということは正命でもふられましたように、人間は五官に左右され、自己保存に自分をおいてしまうからであります。

又、そうした想念が湧いてくるというのは、想念の母体である意識のどこかに記録されているのでありますが、しかし、その記録が縁にふれて想念として浮んできた時には、常に、善念に切り替える練習が必要であります。

神の心、仏の心は慈悲と愛であります。この心に、一步でも、二歩でも近づくよう心がけて下さい。

反省の要 P242

正念とは、慈悲と愛から生まれてくる目的意識であり、また、現実的行為の中では足ることを知ることである。足ることとは欲望の限りを知ることであり、進んでは人間としての目的を悟れば、残るは義務と責任しか残らない。

私たちの意志はそうしたときに、本当に発揮されてくるであろう。

心行の言霊 P252

正しく念じないとはどういうことでしょうか。

正念の反対は邪念です。邪念とは自分の都合だけしか考えない自己本位の想念であり、欲望の想念です。

欲望の想念が激しければ激しいほど、この地上界は混乱してきます。足ることを知らない欲望はたがいに相入れないエゴとなり、エゴは自分本位の我であるから相互協調は非常にむずかしいものとなります。

念の方向が自分本位であればあるほど苦悩が多く、心に業をつくります。人びとの心に業が多く生まれると、真実とニセものの区別がわからなくなり、地上界は末法となってゆきます。

思うことは念によって具体的な行為になります。

たとえば、どここの学校を受験したいと考える。しかし、自分の実力からしてA学校はむずかしい。ではBにしようか、Cにしようかと思案します。

この段階では、思うこと、考えることが心の中だけの話で、まだ行為にはなっていません。

ところが、あれこれ考えた末、Bに決定したとします。すると当人は、Bに向かって進んで行くでしょう。つまり、受験準備という行為が始まるわけです。

念の働きは、B学校に決めた、という意志の働きなのです。

すなわち、念というものは、こうしよう、ああしよう、こうありたい、という目的意識であり、意志の決定であり行為である、というわけです。

念によって、私たちは、心の中で思うこと、考えることの創造作為を具体的に形に現わしているわけです。

人の思いは、あの世に通じ、人の心にも通じます。しかし、ふつう、人に通じないのは大抵は外に気をとられ、それをキャッチしても、打消すか、忘れるか、仕事に追われているためです。

しかし、思うことを、念を通じて心に強く働きかけますと、相手によっては通ずるものです。怒りや憎しみ、嫉妬の念は、具体的にはキャッチできなくとも、その念を発した人に道などで出会うと、なんとなく敵対視してしまう、というのがそれです。ところが、そうした念波が発せられても、こちらに何もなく、慈愛の心に満ちていると、敵対視の心は湧いてこず、その念を発した人はかえって気まずい思いにかられることになってゆきます。

このように念というものは、具体的な意志決定とそれに伴う行為であると同時に、念そのものの働きによって他に作用を及ぼします。

念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものです。

また、一度発した念波は、一秒間に地球を七回り半もまわる光以上の速さで自分に返ってきます。つまり輪廻します。善念は善念として返り、悪念は悪念として、発信者に返ってくるのです。

ですから、常に安心した境涯を毎日の生活の上に望むならば、自分さえ良ければ外はどうでもという自己保存の念を改め、他を生かす、助け合いの、愛の想念、中道の法を、まず、心の中に

確立させることです。

思うこと、念ずることは、万象万物の創造の根源であり、仕事をなし得るエネルギーでありますから、これを正すことがなにをさておいても重要であるといえます。

人の幸不幸の分かれ目は、心の中の思うこと、念ずることによって決定されてゆきます。また、想念は、カルマをつくってゆきますから、そのカルマを超えるためにも、左右に片寄らない心の在り方が重要になります。

中道の想念は、慈悲と愛、そうしてそれは調和というバランスがとれた状態をいうわけですが、中道の極致は神の心であり、法でありますから、ここまで人の心が昇華しますと、人は苦楽のカルマから本当に解脱することができます。

ところで、ときおり、こういう質問をうけます。

思うことは現われる、念ずるとその通りになるというが、私は金が欲しいと日頃から思い念じているが、さっぱり、金が貯まらない、これはどういうわけか、というのです。

お金が欲しい、金を貯めたいという欲望は大抵の人がそれを思い念じています。念は人によって強弱がありますが、みんなが同じ物を念じますと、その念はぶつかり合い、交錯してゆきます。そうして、やがて交錯した念は、強い念に弱い念が吸収され、強く念じた人に集まります。つまり、それを望む念の強いところに金は集まってくることになります。

お金が集まるもう一つの理由は、人にはそれぞれ今生での目的があります。それは本人の今生での意志とは関係なく働きます。今生の目的が経済的問題よりもむしろ人を救うことにあるとすれば、その目的を外れた意志をいくら強くいだいたとしても、お金は集まらないということになります。

こうした意味から念の作用は、その人の今生での目的と合致したときに、もっともよくその効果を現わし、最大に発揮されます。

金が集まらなると愚痴をいう前に、人も欲しがるお金(お金は有限)を集めれば、集めただけその反作用もあるということを考えて下さい。いつときの悦楽を求めることと、長期間にわたる苦悩を考えるならば、もともと一定限度しかない物を奪い合う愚かさ気付くと思います。

一事が万事、何事によらず、このように考えていけば、念の作用はどのようなものであり、念はどのように使えば正しく行使できるかということが、おわかりになったと思います。

8. 【正定】

心の発見(神理篇) P190

私達が神仏の子としての自覚ができることにより、毎日の生活自体変化がでてくるはずである。この世は修行所である以上、やがては帰らなくてはならない世界が存在しているのである。

私達は煩惱という海の中でも悟ることはできる。心の調和を計り、反省の瞑想は、己の靈域(オーラ)を造り出し、己の心の神性、仏性が潜在意識の扉を開き、不滅の世界、あの世の生活をも思い出すことができるのである。

意識は実在界も、現象界のどこにも自由自在に行ける。

私達が眠っているときは、肉体からの霊子線を通して、実在界や、この現象界の知っている場所や、かつて自分の生まれた過去世の場所に行っている場合もある。さらに神仏から安らぎの光のエネルギーを意識は吸収してくる。

眠る、ということは、肉体という舟を休めるとともに、意識、心の洗濯にもなるのである。

また、意識はその天使達に磨かれるときもある。酒も呑まないのに二日酔いのような状態や、風邪でも引いたのではないかと、という肉体的症状がそのために起きる場合がある。ときには、心臓の動悸がしたりして気分が悪くなる時もある。

しかし、守護霊や指導霊に磨かれた十数時間後はすっきりする。ただし、その肉体的症状は病気ではないから医者に診せても治らない。

人々の中で、もしこのような現象に悩まされている方々があったら、良く反省をし、早速正法に合った生活をするをおすすめする。

これ以外にも、イライラ、怒りっぽい、などという状態になっている人々は、これは不調和な低級霊に支配されている場合が多い。神仏の光の保護を受けることができないとこういふふうになるときがある。

良く頭痛持ちなどという人があるが、これは取り越し苦労をする人に多い。あらゆることを全部頭に詰めこみすぎるのである。

私達の頭脳は、体全体の細胞集団の総合指令室であり、コントロールセンターなのである。

記憶室は、大脳皮質の神経繊維に流れる一切の電氣的な波動粒子によって成立している。そこから発信された振動のエネルギーは、意識に伝達されて記録される。

「私達のすべては脳内部に記録されている」という考え方はだから間違っているのである。もし私達の脳が、一切の記憶装置を持ち、考えるエネルギーを発信する場所、と考えるならば、眠っているときに、考えたり見聞したりすることはできない（も出来る）はずであろう。

私達が眠っていても脳波の振動が発信されているというのは、意識とのコンタクトを計っているためであり、霊子線が切れて意識がもどらなくなったときは、脳波の振動は停止し、肉体は光子体と分離され、あの世に帰ること、死を意味することになるのである。

脳波の振動数も、五官を通して脳内に通じ、その発信振動により意識に報告されているのだが、睡眠中の振動数が異なっているのは、このような組み合わせになっているからである。過去世は、肉体細胞では思い出せない、ということである。

私達は日本にばかり生誕するわけではない。肉体条件の異なるあらゆる世界の国々に自分が望んで転生輪廻している生命であることを知るべきで、肉体的先祖がすべてであると考えている人々は、ここに誤りを起こすのである。

生命は両親から、と考えるなら、なぜ親子の間に不調和な現象が起こるのか。なぜ性格が異なるのか、なぜ考え方が異なるのか。

これには答えられないはずである。

メンデルの遺伝の法則は、肉体遺伝であることを忘れてはならない。

私達の脳細胞は約二百億ある、といわれている。しかしそこは、記憶の道程路にしかすぎない。もし人々が、記憶脳細胞を唱えるならば、私達の交信の実験をお目につけよう。

私達霊道者は、あらゆる次元の異なった世界との交信が可能になっているのである。

正しい神理の実践生活の中で、定に入ることにより、私達は、体が宇宙大に拡大され、神仏の意識と調和され、心の安らぎを味わうことができるのである。

ある人は、想念停止によって悟りを開いたという。万象万物一切の現象は、一時も停止することがないにもかかわらず、想念停止の瞬間に動物霊に支配され、俺は神だ、などという偽善者もいるが、そういう本人は常に病弱であり、また物欲念を拭き去ることのできない人なのである。病弱の原因を、信者の業を受けたのだ、と逃げ口上をいうが、事実上、暗い想念によって憑依霊に憑かれているのである。

また、山中に入って修行したと称する者が、あたかも立派な修行者のように思われがちであるが、これは逆である。

滝に打たれたからといって、煩惱は滅するものではない。肉体修行の苦しさに、意識と肉体が調和せず、その瞬間に主として動物霊に支配され、その変化を見たり、霊聴を聞いたとかいっているが、これは本物ではない。仙人界や、天狗界の人々に多い修行法であるが、このような人々は自我が強く、慈悲心もなく、本人が常に不調和で安らぎのない者であり、悟りには遠い人間である。神秘の術に通じている、などという手合にはこうした動物霊に支配されている人々が多い。

このような、行ないは、正しい定とはいいがたい。

正法に帰依して悟りを開いている人々は、皆謙虚である。驕る心はないのである。この人々は、一切の現象にとらわれず、正しく八正道を實踐し、三世を見通す力を持っている。

人間は山中に入って修行するために生まれてきたのではない。正しい仕事に専念し、人間らしく生きるために肉体舟を持ったのである。

インドのゴータマも、六年間の山中の修行では、遂に悟ることがなかったことを知るべきである。

イスラエルのイエスも子供の頃、山中に入ったが、ほとんど肉体的荒行はやっていない。神理を悟らないで、禅行をしても、それは形式にしかすぎない。神理を悟った実践生活の中で肉体的な山中行など、スポーツとしてなら良い。だが、悟りは、形式や理論ではない。形式や理屈のみにとらわれている人々は、未だ悟りの一歩にも踏みこんでいない。正しい定とは、神理の悟りと、正しい想念と行ないの中に成就するものなのである。学問仏教でも、形式仏教でも、観光仏教でも、また葬式仏教でも、もはや悟りを得ることはできない。

インドの時代に説いたゴータマの仏教によってこそ、悟りへの道は開けることを悟るべきである。

イエスの時代に戻ることである。

なぜなら、その当時の神理に帰ることが、現代社会の人々に、本当の心の尊厳を悟らせ得る早道だからである。

心の発見(現証篇) P294

・・・心のなかに造り出される、こうした不調和な問題を反省して行くに従って、誰の前でも心を裸にできる人間になること、これが大切だといえよう。

そして、「一日一生」と観じ、いつでも無常の風を見、しかし何の思い残すことなく執着を断つ。そうすれば、光明に満たされ、天上界に還ることができるのだ。

つまり、そこへ還れることを心がける、そのことが大切なのだ。

ところが、様々な心の曇りは、私達の靈域をいつも崩してしまふ。

反省以外に、この曇りをふるいのけることはできないのだ、ということを知ることが必要なのである。

反省は、盲目の人生航路において、犯した罪を除去するため、神が私達に与えた慈愛を受けるチャンスであるからだ。

人間釈迦① P119

正定の根本は反省であろう。反省は光明世界に住するかけ橋であろう。ねたみ、怒り、そしり、そして諸々の執着から離れるには、反省を以てほかにはない。反省を積むことによって、心と肉体の調和が生れ、進んでは己の心と大宇宙の心との合一がはかれよう。反省せずして、心を空にするとマラー（魔王）、ヤクシャー（夜叉）、アスラー（阿修羅）、ナガー（竜、蛇）に支配され、自分の心を悪魔たちに売り渡してしまうことになる。

正定は反省という止観の行為でなければなるまい。

人間釈迦② P258

禅定は第一から第九の段階に分けられる。第一とは反省である。反省し心の曇りを払うと、第二、第三と進むことが出来る。もし反省を省略し、無念無想の状態を続けようとするとな魔に侵される。

守護霊との対話の出来る禅定は、第四禅定である。もちろん第四禅定でも、人によって中味が異なる。話が出来たからといって、禅定の内容が、第四段階に入ったと思っはならない。

釈迦の禅定は第九禅定といって、大宇宙と一体となった禅定であり、この禅定は余人には真似が出来ない。

人間釈迦③ P192

智慧の湧現は法の実践にある。心の中につくり出された不調和な曇りを除かない限り、無明はいつになっても晴れることはないであろう。

曇りを除くには、法の物差しにより思念と行為をふりかえり、その間違いを修正することが最も大事である。つまり、反省である。そうして、心の中に曇りをつくらないように、常に正道を歩まなくてはならない。

正道を歩むとは、煩悩の偽我を支配することである。

そなたたちの心の中に本来ある、己に嘘のつけない善我なる心で修行することが、正道を歩む修行者といえよう。

心を外に向けると、遊興な生活におちこむことになる。そこには千尋の谷が待ち構え、苦悩しか与えないだろう。

悪業は、即座に報いとなって現われることはないが、しかし、山中で焚火をたいた後の灰にかくれた火種のように、風によって、いつ山野を焼きつくしてしまうかしのものだ。

また、愚かな者たちは、常に地位や名誉の欲望に苦しみ、物質、財宝、情欲への執着心のため、自らを苦しめている。サロモンは名聞に耳を傾けてはなるまい。利他の行為を忘れることなく、自己保存の欲望を捨て、常に安らぎの生活の中に住すべきである。

法の水を飲んだものたちは、心が洗われているから、物にこだわることなく、平和で安らいでいよう。

グリドラクターの岩場を見よ。

あの岩場はどんな風にもゆらぐことはないであろう。自然の中に安住しているので、物に動かされることはないからだ。

修行者もこれと同じように、そしりや怒り、あるいはほめられても心を動かしてはならないのだ。一方に心がゆれると、もう一方にも心が働いてくるからである。

いかなる言動にたいしても、正しく見、正しく思い、正しく語り、正しく仕事を為し、正しく生活し、正しく道に精進し、正しく念じ、そうして、常に反省を怠ることなく、心を丸く豊かに保ち、禅定を楽しまなくてはならない。

楽に溺れる欲望を捨て、いかなる苦難にあっても、その原因を究明し、原因の根をのぞき、心の中に法灯を燃やしつづけなければなるまい。

しかし、そうした中であっても、悟りの彼岸に到達する者は少なく、無常な物質世界に執着し、さまようことのなんと多いことか。

そなたたちは転生の過程で学んだ偉大な智慧によって、すべての欲望に足ることを悟り、人と争うことなく、あの大空のように、青く澄んだ、広い心でいなければならない。生死の輪廻からは、足ることを知った心によって解脱できよう。

修行者よ、百万巻の書物より、安らぎの一言の方がすぐれていることを知らなくてはならない。真の救いは言葉ではない。知識でもない。慈悲心にあるからである。

また、心の中の偽我到ち克つことは、戦場で百万の敵に勝つより、すぐれた勝利者であることを銘記すべきである。なぜなら、大きな堤も蟻の一穴によって崩壊するであろうし、心の苦悩は、心をいやすことによってしか得られないからだ。

智慧ある者は、まずこの世の業火から急いで逃げ出さなくてはならない。この世は、怒りと愚痴に満ち、足ることを知らぬ欲望が渦をまいているからだ。そなたたちの心がこの業火に見舞われ、火の粉を浴びると、迷いと苦しみをうけよう。

善なる心こそ、そなたたちの主である。その主は永遠にして不滅の自己だ。その自己を失わぬためにも業火から離れることだ。

安らぎと調和は真に自己を愛する者によって得られよう。自己の喜びは他にも転化しよう。

つまり、自己を愛する者は、他を愛することもできるのだ。

まず、自分自身を修めなくてはならない。法を依りどころとして、自己を確立することだ。

業火に見舞われても、その火を消し去るだけの自分をつくるのが先決なのだ。

遊行に出て、法の種を蒔いても、心の開拓がおろそかになっていては、あたかも粗悪な大地に種を蒔くの似て、収穫は実り少ないものとなる。

智慧、努力、勇気――

これこそが自己を確立し、人びとを迷いの淵から彼岸に至らせる唯一のあり方なのだ。

人をアテにしてはならない。

人のせいにしてはならない。

善・悪いずれの結果が現われようとも、その一切は自らの心と行ないが作り出したものであ

り、他人のせいではないことを悟らなくてはならないだろう。

そなたたちの修行の目的は、自らに克つことであり、他人に勝つことではない。

心の原点 P022

生まれてきた環境、両親の教育、習慣、社会の思想などによって潜在している意識の自我が芽生え、やがて、その性格は善我（ぜんが）と偽我（ぎが）を造り出してゆくということである。

このように、人間は本来善なる心でこの地上界に出てくるのだが、成長するに従って、心を暗い想念の曇りによって包み、罪を犯してしまうのだ。

しかし、神は私達に反省という慈悲を与えている。

誤りを犯しても、あの世（実在界）では、表面意識が九〇%（この世の表面意識は一〇%）も出ているため、善悪の判断がすぐつくのである。

そのため、心に不調和があれば、すぐ肉体的に光の量が少なくなってしまうため、反省をして誤りの修正をしてしまう。

しかしこの現象界に出てしまうと、表面意識は一〇%くらいしか出ないし、厳しい盲目的な人生航路のため、どうしても正しい判断を欠いて誤りを犯してしまう。

しかし、犯した不調和な想念と行為について、心から反省し、二度と同じ過ちを犯さないで、より光明に満ちた豊かな心を造り出すことによって、罪は許されるのである。

許すという愛の働きがなかったならば、私達人間は永遠に救われることはないだろう。

人々の罪を許し、人々をして生きる喜びにいたらせ、お互に手を取り合い、助け合って調和へと高めて行くことによって、地上の大調和という環境が築かれて行くのである。

慈悲を神仏の縦の光とすれば、愛は人の横の光といえるだろう。

このように、縦、横の調和された慈愛の光が結び合ったとき、人は神を発見し、仏性である己を悟ることが出来るのである。

このように、この大宇宙全体は、慈悲と愛によって調和され、維持されているのであり、それはまた慈悲、愛の塊りであるといえるのである。

心の原点 P093

人間は、それぞれの生活の過程において、人生の無情さや哀れさ、悲しさに直面し、日常生活で反省する機会を仕組まれている。

親しい人との死別、社会の矛盾、病気、どうにもならない運命のいたずら、生きているためのむなしい努力など、人間は、あらゆる苦しみをとおして、反省の機会を求められる。それは、苦しみの原因を取り除くことが重要だからだ。

広い、豊かな丸い心を造り上げ、神の子である自覚が芽生えたとき、実在界の天使達は、私達に喜びを与えてくれるのである。

人間は、何のために生まれ、何のために苦楽を体験し、何で死んで行くのか、そして、死後の世界は、と誰でも疑問を持っているだろう。

その疑問から、人生を正しく生きようと、過去の誤った考え方や生活の在り方を心のなかで反省し始める。そのとき、私達に潜在されている意識の扉は開かれ、私達は過去の世で学んだ何割かの体験を思い出すのである。

そして、中道の、偏りのない正しい心の判断にもとづいた生活の日々の努力がなされたとき、自らのなかからひとりよがりの心は消え、人類は皆兄弟だと悟り、偉大な慈愛の力に、私達の霊囀気は高まっていく。

自ら、中道を踏みはずしてきた欠点の修正を、勇気をもってしたとき、心は浄化され、さらに光明に満たされて行くのである。

心の浄化が進むにつれて、守護霊や指導霊や魂の兄弟達は、私達の新しい魂の進化への努力に対し、互いに協力して靈感を与えたり、直接語りかけて、人生の指針を正しく教えてくれる。

心の原点 P097

反省は、自分を改めて見なおす、意識の転換作用といえよう。

自分を改めて見なおすということは、自分を客観的に見ることであり、そこには、自我の存在がなくてはならない。

客観的に見ると、自分の欠点や長所がはっきりと出てくるだろう。その欠点を改めることが、もっとも大切なことなのである。

そしてその根をとり去ることだ。

自分を客観的にみつめているときは、私達の守護、指導霊も同時に見ているということを悟らなくてはならない。

私達の心のなかには、真実と偽りが同居しているが、反省によって、偽りの暗い曇りを消し去る、そのことが反省の大きなメリットであろう。

欠点の根が除外されるに従って、私達は、悟りへの一步を印したことになるのである。

そして悟りの段階が進むに従って、観自在の力が、私達の心のなかに湧き出てくる。自由な心を得て、執着から離れ、生死を超えた大悟を得ることができるようになるのである。

人間は、決して孤独ではない。

心の世界、実在界には、私達の魂の兄弟達や友人達がいて、常に、現象界で修行している私達を見守っていてくれる。そのことを忘れてはならないだろう。

肉体舟の五官煩悩も、このような境地になれば、やがて消滅し、自ら悟りの菩提になることができるのである。

心の原点 P126

最後に「正定」であるが、これは反省である。

前述の七つの規範に照らして、今日一日の自分の想念と行為に、行きすぎた点がなかったかどうかを振り返ったり、間違いがあったらこれを改めて二度と、同じ過ちをしないことである。

反省は単に、ああ悪かった、良かった、で終わってしまっただけでは、正しい反省とはいえないのである。これは重要な点である。

反省したとき、間違いを犯したことを発見したならば、その間違いはどのように起こったのかといった、自分の心のなかの原因を追及してとり除くことが大事なのだ。

それをとり除くことが心を浄化することになるのである。その結果、精神と肉体がまず健全になり、家庭の調和、職場の調和、社会の調和につながって行くということだ。

日常生活のなかで、物ごとに失敗したなら、その失敗の原因を究明して、二度と同じ失敗を犯さないようにつとめる。そうすれば、やがてその失敗は、成功に結びついて行くということである。

反省もしないで、同じことをくり返すようでは、成功することは困難だ。

人の心と行為も同じことなのである。

「正定」の基本は、反省にあることを深く肝に銘じなくてはならないだろう。そして瞑想的反省は心の曇りを除き自らの霊囲気を高めて行くことができるということを知らなくてはならないだろう。

もっとも、反省、反省と、反省ばかりに終わると、自らの心を狭く小さくしてしまうから注意すべきである。

人間には、内向的、外向的、楽天的、悲観的といういろいろな傾向がある。従って私達は、自分の性格に適合した反省の仕方、これを身につけて「正定」をすることが必要になってくるのである。

正道は、各人の生活の智恵や実行力を傾け、勇気をもって努力することがそれにいたる早道であり、自らの心の想念と生活が豊かになる近道でもある、ということを悟るべきであろう。

心の原点 P316

反省の瞑想は瞼を軽く閉じ、瞼の中の眼は真っすぐ前方をみつめる。瞼を閉じると大抵はねむけを催し、反省が思うようにゆかないものだ。そうならないために中の眼は前方をみつめるよう

にするのだ。

ねむくなると、たいていは中の眼は上に移動する。疲れた時、夜が遅い場合は、瞼を閉じると、自然にコックリがはじまる。瞼があいているときはそうでもないが、瞼を閉じるとそうなるものである。これは自然現象であり、生理的なものなので仕方がない。

しかし、そうした場合、中の眼を、真すぐに前方を見定め、意識をしっかり定めていると、そうねむくなるものではない。

そればかりか、心が一点に集中でき、反省が比較的容易にできるものである。

・・・夜になると一日の疲れも出るし、前記のように、瞑想に入るとねむけを催してくる。どうしても反省に集中できないという場合は、瞼を軽くあけ、座している少し前方に視点を定め、反省するようにすると、ねむけは解消できる。反省になれてきたなら、再び眼をとじ、瞑想の反省に入って行く。

夜は昼間とちがい、雑音が少ない。草木の活動も静まり、動物達も眠る。それだけに、夜の瞑想は、深くなり、心が統一しやすい状態になる。

同時に、あの世の天使達の通信も受けやすい状態になる。昼間は、家事や仕事に気をとられるので、天使達の通信をキャッチしにくい。

心の指針 P114

正定の在り方は、日常生活における正しい想念で生活が行なえることを意味します。

つまり、八正道の神理に適った生活行為なのです。

それにはまず、八正道の正見、正思、正語、正業、正命、正進、正念について、反省をすることから始まります。

今日一日をふりかえり、八正道の正しさに反した想念と行為がなかったかどうか。あったとしたら、どこに、なぜ……というように、静かに反省し、思念と行為について検討することです。そして、正道に反したことは、神に詫び、明日からは、二度と再び同じ過失をくりかえさないよう努力することです。

こうして、日常生活が神理に適った生活行為が出来るように、毎日の努力をつみ重ねてゆくことです。

正定は、反省から始まり、そうして、神の心である調和の心と自分の心が一体になることです。しかもそうした神の心を、日常の生活の中に具現出来るようになることなのです。

つまり、正定の第一歩は、禅定という反省的瞑想から始まり、やがて、守護・指導霊との対話となり、菩薩の心である慈悲と愛の行為が出来るようになることが第一の目的。

第二の目的は、禅定の心が、そのまま日常生活に生かされてゆくことです。

禅定は、日常生活をより豊かに、自己の心がより大きく、広く、神理に適った生活が出来るようになるためのものですから、禅定のための禅定、つまり、反省のための反省では、本当の反省にはならない、ということです。

一日中禅定しているわけにはゆきません。私たちは仕事を持ち、家庭を持ち、そして、社会の一員として生活してゆくのですから、禅定は、一日のうちの一部であり、一日の活動の動力源としなければなりません。

そうした意味から、正定の在り方は、禅定そのものではなく、反省そのものでもなく、一日の生活行為が八正道に適ったものでなければならぬわけです。

こうして、私たちは、正定を日常生活のものとすることによって、はじめて、如心（によしん）という段階に到達します。

如心とは、己の心がある程度理解できたことであり、それはまた相手の心をも見通せる能力を備えた状態をいいます。

普通は、人の心とか、性格というものは長いこと交際してみないとわからないものです。

あの男とは二十年もつき合ってきたが、あんな男とは知らなかった、という話をしばしば耳にします。

ところが、如心の心を体得すると、未知の相手でも、名前さえわかれば、その人の意識の程度、

性格、生活態度がわかってしまうのです。

同時にまた、日常生活が安心して送れるようになります。

こうのように、八正道の功德というものは、普通では考えられないようなすばらしいものがあるわけです。

悪霊- I P139

自分の欠点というものは、片寄りすぎた考え方と行動である。そこで、その片寄りを修正するために、人には嘘は言えても自分の心に嘘は言えないはずだから、その嘘の言えない心で修正する。別な言葉でいえば第三者の立場に立って、自分の今考えていることと行動について反省するのです。そうすると、たいてい、自分のエゴや欲望が自分の欠点をつくっていることがわかる。反省してみて、自分に間違いがあったなら、神に素直に詫びることです。

そうして、二度と再び同じ間違いを犯さない決心が、自分の欠点、自分の不幸から離れていく大事な要素となるわけです。

・・・反省は、小さい時に育ててくれた母について、母からしていただいたこと、してやったことのひとつひとつを思い出し、心の中の曇りを除いていくことです。まずたいていは、母からしてもらったことの方が多く、母にしてやったことの少なさを感じるものです。同じようなことを父についても反省する。母と自分との関係だけでも、何日もかかる。思い出すまで、心を落ちつけて座ってみることですね。

このようにして、学校の先生、同窓生、そして社会に出てからの対人関係などを反省していくと、自分の苦悩がどこから生じてきたかがわかるものです。こうして、心の重荷や執着を除いたときに、心の中の曇りは晴れ、神の光に満たされてくるものです。大事なことは、自分の心を直すためには、知恵と努力、そして勇気と決断が必要でしょう。

天使の再来 P049

反省は、人間に与えられた特権であり、慈悲であり、救いであります。動物には、反省する能力も機能もありません。人間が万物の霊長たる所以も反省する機会があるからです。

人をそしたり、妬んだり、嫉(そね)んだり、人間の想いは一念三千というように、千変万化、際限がありません。

しかし、こうした時に、反省の瞑想は、己の魂が磨かれ、神仏の光をうけて魂は浄化されてゆくものです。

一日の生活を終えてから、五分でも十分でもいいです。今日一日をふりかえり、反省の瞑想を続けて下さい。そして、どこがいけなかったか、どうしてそうなったか、人をそした原因はなんであったか。その原因を追ってみて下さい。その結果、自分をかばう想いがあった。自分を満足させるためであった、と気がつけば、その人は以前よりも一歩も二歩も前に進んだこととなります。即ち、神仏の光をうけたこととなります。

そうして、こうした反省のくりかえしによって、あなたは、正法という階段を知らぬ間に上ぼっていたことを、あとになって気がつくと思います。

反省の要 P007

魂の前進は正法という正しい循環にあるのだから、中道の尺度で一日の言動、心の動きを反省し、想念の浄化、修正に努力をつづける。反省後の瞑想は心と肉体のバイブレーションが神に近づき、晴れ晴れとした気持になる。その気持で一日の生活を送ること。

反省の要 P060

反省とは、止観である。想念をとめ、過去をふりかえり、自分がなした行為、想念をあらためて、みつめる。そうして、その想念行為をみつめた結果、その想念行為が八つの規範である八正道に、適っていたかどうか。もし、適っていなければ、その原因を追究し、原因、結果の正体を見極める。そうして、その正体がわかったならば、二度と再び、その原因に翻弄されない想念と

行為、八正道に適った生活を、実践してゆくことである。

反省の要 P068

反省の禅定に入る前に、まず丸い心を心の中に描いて欲しい。想念はモノをつくるので、太陽のような広く大きく、あらゆる生命を生かす生命体を心に想像することだ。そうして次に、静かに自分の欠点と人との関係の中で反省をして行くと、丸い心のどこにゆがみがあるかが分かってくる。こうして欠点の原因が分かったあと、再び丸く豊かな心を心の中に想像し瞑想する場合は瞑想をして欲しい。

反省の要 P084

正法の反省、八正道の目的は要約すると、大宇宙を支配する慈悲の心に自分を高め、愛の行為ができる自分をつくり上げることである。別な言葉でいえば、反省と実践は感謝と報恩のめざめにあるわけである。

・・・生かされている事実を理解し、人びとに報恩の行為が心に抵抗もなく、素直に、やれることが正法の目的である

心行の言霊 P260

正定とは、反省をいいます。

私たちは、自己反省を通して、ものの道理が理解され、同じ間違いの愚かさから解放されてゆきます。

反省こそ、神が人間に与えた慈悲であり、愛の能力といえましょう。

動物にも本能・感情はありますが、反省という理性の能力、知性の働きは、人間を置いてほかにはありません。

この意味で、正定の反省は、人間だけに神から与えられた特権であり、その特権を生かしてこそ、進歩があり、無限の調和に向うことができるのです。

反省は、正見、正思、正語、正業、正命、正進、正念の七つの規範について、行います。

中道の尺度を持って、今日一日をふりかえり、ものを正しく見たか、思ったか、語つたか、働いたか、生活したか、念じたか、友をいたわつたか、と反省します。

人の個性と業というものは、一見似ているようだが、ちがうのです。しかしその個性と業というものが、日常生活の上に非常に大きく影響しており、したがって、その個性と業のちがいを、まず発見する努力、そして反省を試みたいものです。

それにはまず、ずっとさかのぼって、一才から十才、十才から二十才、二十才から三十才、三十才から四十才、というように、年代別に自己反省をしてゆきますと、自分の業がどのようなものであり、全体の中での自分の在り方、自分の役割が明らかになると思います。

個性というのは、ここでは、人それぞれの持ち味、特性、そうして、ここから生ずるその人の人格、役割を指します。

年代別に反省をしていきますと、人それぞれの性格が、大体、三才頃から十才ぐらいまでに、ほぼ形づくられていることに気付きます。

たとえば、仮に、短気の性格があつて、人を傷つけ、対人関係、仕事上の関係、家庭の関係の中で気まずい思いをし、それが原因で、折角のチャンスをにがしてしまうという場合も、短気の性格をつくった年代は大体、この頃が多いのです。

末っ子で育ち、周囲から、チャホヤされると、知らぬ間に我儘が身につきます。自分の主張は家庭では大抵通ってきたとしますと、さて、成人して社会に出ると、社会は家庭とはちがひ、そうそう思い通りには運びません。自分の希望が適えられなくなれば、心の中は平安ではありません。子供の頃の我儘は、最初は身近な家庭で爆発し、家の中でどなったり、夫婦ゲンカになったりします。うっせきした気分は、こんどは対人関係や仕事上の関係まで発展してゆきます。

こうみてきますと、短気の性格は、自分の我が思うように通らないときに起こるものであり、それは子供の頃のチャホヤ育てられた我儘の生活に原因があつた、ということです。

もちろん人によってその短気の性格が二十代、三十代につくられる場合もあります。両親に早く死に別れ、子供の頃に非常に苦勞する。あるいは、家が貧しいために苦勞する。二十代、三十代でその苦勞が実を結び、やること、為すことが図に当たってきますと、人のやることがまどろっこしく、ついでに散らしてしまいます。若いうちに苦勞した中小企業のワンマン経営者にこういうタイプが多いのです。原因は、二十代、三十代にあります。しかし、これでも反省をして行きますと、小さいときの苦しみが身につく、人をそねみ、うらみ、憎しみの心が内在しており、成人してから、それが短気という形で変化して出る場合があるからです。

苦勞して成功した人は、人を信じないことが多いのです。家庭の愛情生活が不足していますから、どうしても孤独になり、自分の意見を押しつけたり、短気という性格になりやすいのです。

このように短気という性格一つとっても、人それぞれの原因は異なりますが、年代別に見るとたいていは、子供の頃に作られ、成人するにつれ、さまざまに枝葉となって変化していることに気づきます。

業というものは、自分自身にとっても人にとっても、プラスになる面が少なく、いわゆるその人の欠点、短所という形で現れています。

業はもともと執着の想念であり、それは家庭の環境、教育、思想、習慣、友人の影響を受けてつくられてゆきます。

食べ物一つとっても業となり、その人の性格を形づくってゆきます。

たとえば、肉食は血液を酸性にし、寿命をちぢめる原因をつくる、だから、植物性のものしか食べないとしますと、世間の見方、人の見方、そうしてものの価値判断が、自分でも気づかぬうちに偏見を持つようになります。つまり、これは良い、これは悪い、というように、物事を簡単に割り切り、断定するようになって行きます。

良い、悪いの判断は大事なことですが、それが自分だけの浅い経験を土台にしている場合、自分には当てはまっても、人には当てはまらないという場合が多いものです。

イエス・キリストは、肉類も結構食べたし、酒も強かったようです。

釈迦も、食べ物にこだわらず、出されたものは何でも食べたものです。

食べ物は何でも食べよといっても、現在、病気の人、肉体的に欠陥がある場合は食生活を規制しなければなりませんので、そういう人の場合は別です。

いずれにせよ、人の性格、業というものは、私たちの生活環境によって、知らぬ間につくられます。その中でしか自分を見出すことができないとすれば、魂の前進はあまりはかばかしくゆかないでしょう。

また、業というものは、常にリンネしており、短気という性格は、ふだんは出なくとも、その場面に会うと、つい出てしまうという性質を持っています。つまり、短気のリンネです。

原因がわかり、その原因に翻弄されていたことが気づきますと、その原因によって影響を与えてきた人々、そうしてまた、詫びなければいられない気持ちになるものです。

悔い改めの心こそ、業を超えて行く足場になるからです。

もし、本当に悪かった、あるいは感謝と報恩の気持ちが湧いてこないとすれば、その人の反省は、まだまだ本物とはいえないでしょう。

己の欠点、短所、業というものは、自分を傷つけ、人をも傷つけてきているからです。

心行の言霊 P268

私には反省する材料がないという人によく出会いますが、こういう人は反省が浅く、反省とはどういうものか、まだ、わかっていない人だといえます。

恵まれている人にかぎって、反省する材料がないというようですが、ではその恵まれた環境はどのようにして、つくられたか。夫か、両親によってか、夫は社会に出て、どう働いているのか、両親はどうして財を為したか・・・。

このように考えてくると、今の自分の環境をただ盲目的に是認し、その中に安住している自分を発見するはずです。恵まれぬ人びとを考えた場合、現在の自分の立場に疑問がわいてくるはず。このように反省の材料は山ほどあるものです。

反省の仕方としては、各人が工夫してやってもらってよいのです。

が、一つの方法として、まず、現在の欠点、短所をノートに書き記し、その一つ一つについて、年代を追って、原因をつきとめます。

もう一つのやり方は、両親と自分、夫と自分、子供と自分、兄弟姉妹と自分、友人と自分、上役と自分、後輩と自分、得意先の人びとと自分、隣人と自分、というように、他と自分とを対比させ、これまで生きて来たさまざまな状況の中で、自分の心がどのように動き、どのような態度で過ごしてきたか。

これらを前と同じように年代別に追って行く方法です。

ものを対比しながら反省をしますと、比較的自分本位の傾向から離れ、客観的に真実をとらえることができます。

長い人生航路の間では、人は、一度や二度、自分を反省する機会を持つものですが、大抵は自分本位の想いに流され、自分をかばってしまうようです。これでは中道の反省とはいえません。中道の反省は、自分の在りのままの姿、内在する正直な心に照らして、両親に対して自分はどうか対処してきたか、両親の献身に対して、自分はどれほど孝養したか、と疑問、追究して行くものです。

両親と自分というテーマの中から、両親を困らせた、両親を悲しませた、自分の我儘が、いつ、どのような場合に、どう現われて来ていたか、また、ものに感謝する、しないということも両親との関係において理解されてくるでしょうし、また、子供の頃の生活態度が、現在の性格を形作っていることも明らかになって来ます。

こうして、自分の欠点はすべて自己保存という自我の想念がつくり出しており、この想念に自分が支配されているかぎりには、正見、正思、正語といった正しい生活、調和された生活は期待できないわけです。

不幸の100パーセントは自分の想念の在り方にありますから、幸福を望むなら、中道の生活に軌道修正する必要があるわけです。

私たちの心の姿は、このような状況の中で、次第に形作られ、本来あるところの黄金色に輝く、丸い、豊かな、大きな心が、ヘンにゆがんでいたり、あるいはハート形になり、あるいは感情や本能、知性、理性、意志のどちらかがアンバランスとなり、片寄っているからです。

・・・正定の反省は、このようにして、正しい想念を軸として行われることが必要です。

反省後の瞑想は、心を豊かに安定させます。

心のバイブレーションは神の心に近づいて行きます。

心が落ち着き平静になりますと、守護霊の通信をうけやすくなり、示唆に富んだ考えが腹の当りから浮んでくるようになります。

平静な心を生活の場に保ちつづけますと、外界の動きに心を動揺させることがなくなり、外界のさまざまな動きを正確にキャッチすることができます。

心を内に向け、外に向けるなどということは、外界の動きに心をとらわれず、これらをすべて心の糧とすることです。

誰かが自分を中傷したとします。心が外に向いているときは、すぐそれに反発し、心をいらだてます。ところが内に向いているときは、その中傷を平静にうけとめ、冷静な立場でその中傷の中身を考えます。もし自分に非のないものとすれば、中傷した人は真実を知らぬ気の毒な人であるわけですから、誤解を解く機会がなければ相手のために祈ってやることです。中傷の中に自分を置くと、それだけ心を不安定にさせ、生活のバランスを崩してゆきます。毒は食わないことではありますが、中傷という一つの事柄を通し人間の心の姿を知る機会ができたのですから、心が内に向いているときは、すべてが心の糧になるということなのです。

こうして、正定を重ねていきますと、やがて、静(心)と動(生活)のバランスが保たれ、不動の心が養われてきます。

つまり、正定の目的は、一つには中道に照らした反省にあります。今一つは、その静なる心を日常生活の中で活かしつつける不動心にあるということなのです。

心に法ありて P013

いったい、反省とはなにかというと、一口にいえば、心のわだかまりを取ることにある。自分のクセなり欠点、業の原因をハッキリと自覚し、生活の場において、正道に反した生活に流されないようにすることにある。言葉をかえれば、安らぎある自分自身に立ちかえることである。

反省したから、もうただちに心が晴れて恐いものがなくなり、欠点が消え、業が飛んでなくなるというものではない。もちろん、これまで不明だった原因が明らかとなり、ものの見方、思い方が変わってくるので、反省それ自体にも大きな意義があるわけだが、反省の目的は反省後の実生活に反省の結果がどう生かされるかにかかっているわけである。

一方、反省の尺度は八正道という中道に心の在り方を軌道修正するもので、それはまた慈悲と愛に集約される。別ないい方をすれば、生かされている現実に感謝する気持と正しく生きる報恩の行為ということになる。

八正道以前の私たちは自己本位の自分の立場に執着し、その立場からものをながめ、思い、語り、念じ、仕事をしてきたはずである。だが、八正道という中道を尺度に反省すると、こうした立場のおろかさを知り、自己本位のエゴを捨てて行くようになってくる。すなわち、心の大きな転換が図られてくる。

反省の大きな意義は心の転換なのである。エゴの自分から調和の自分に立ちかえる。感謝と報恩に心が充実してくるものなのだ。反省して自責の念や感謝の心が湧いてこないようでは、まだ本当の反省には至っていない。思い出に耽ったり、精神分析をやっていたのでは反省の目的から外れてくる。

また、反省、反省で、いつも心がしばられ、気持ばかりあせるのも感心しない。周囲の雰囲気へのまれ、ある種の虚栄心に心をゆさぶられているのとあまり変らないからだ。心の安らぎは、まずもって他人でなく自分自身にあるのだから、自己満足にならない自分のペースを早く見出し、そのペースに自分を乗せることだ。正法は、感謝の自覚と、報恩の行為につきる。